

日本福音主義神学会

中部部会報第14号

<目 次>

卷頭言	………	山崎ランサム和彦	1P
ルターの説教と牧会に学ぶ	………	田上篤志	3P
エイレナイオスの聖霊理解の一側面			
—『異端反駁』第4巻における「知恵」としての聖霊—			
	………	大庭貴宣	13P
現代に語りかける黙示録	………	山崎ランサム和彦	24P
アウグスティヌスとは誰なのか	…	松浦 剛	31P
ルター派の礼拝について	………	関 昌宏	34P



卷頭言

山崎ランサム和彦

主の御名を賛美いたします。

中部部会会報の14号を皆様にお届けできる恵みを感謝します。昨年度の総会をもって2003年以来理事長を務めてこられた安村仁志先生が退任されたのを受け、筆者が理事長を拝命することとなりました。入会後まだ日も浅い若輩者の自分にこのような重責がつとまるのか、多くの不安がありましたが、理事の先生方の暖かい励ましに支えられ、ここまで働きが守られてきたことを感謝いたします。まだまだ未熟な者ですが、今後ともよろしくお願ひいたします。

さて、今年は第14回全国研究会議が、関西聖書学院を会場として、11月4日（火）から6日（木）にかけて開催されます。今回のテーマは「福音主義神学、その行くべき方向—聖書信仰と福音主義神学の未来—」となっています。準備委員会による趣旨説明によれば、このようなテーマが打ち出されてきた背景には、戦後福音主義神学のアイデンティティの基盤となってきた「聖書信仰」の概念に搖れが見られる近年、「福音主義神学」の定義と意義について改めて問い合わせ直す必要が出てきた、ということがあります。従来、福音主義神学が、多様な神学的立場に立つキリスト者たちが「聖書信仰」という共通点を通して神学的対話をを行う超教派的な「場」として機能してきたものであるという歴史的経緯を考えるならば、このような問題意識は至極妥当なものであるということができるでしょう。私ども中部部会でも、発題者の提供をはじめとして、この研究会議に全力で協力していく所存であります。

一方、宗教改革500周年にあたる2017年を間近に控え、中部部会ではここ数年ルター関係の研究発表会や公開講演会を主催し、定例の理事会後にもメンバーによる勉強会をささやかながら積み重ねてきました。福音主義プロテstant信の源流とも言える宗教改革、そしてその運動の中心人物たるルターについて改めて学び直すことにより、自分たちの来し方を振り返り、行く末を考える機会としようという趣旨であります。

中部部会が関わるこの二つの動きに共通しているのは、「教会のアイデンティティ」という問題であると思います。プロテstant宗教改革から5世紀を経、ますます複雑化する現代の世界にあって、教会が神の民として主から与えられた使命を充分に全うするためには、まず原点に立ち戻り、自分たちが何者で、どこから来たのかを知ることから始めなければならない、そのような課題に私たちは直面しているのではないでしょうか。

しかし、歴史を振り返ってみれば、「神の民のアイデンティティの確立・確認」ということは、救済史の中で繰り返し起こってきたことであります。旧約聖書においては、イスラエルの民の原点とも言える出エジプトの出来事が繰り返し語り継がれ、民のアイデンティティ確立の基盤となってきたことが分かります（たとえば申命記26章5-10節）。

新約聖書でも、同じことが起こっていますが、今度は新たな問題として、伝統的には神の民から除外されてきた異邦人が神の民にどのように加えられるができるのか、という課題が生まれてきました。イエス・キリストを主として信じてはいるが、民族的にユダヤ人でもなく、また割礼を受けてユダヤ教に改宗したわけでもない異邦

人の会衆は、いかなる意味でアブラハム、イサク、ヤコブの神に属する民と言えるのか、初代教会は大きな「アイデンティティ・クライシス」に直面していました。新約聖書の多くの書はこのような問い合わせに答えようとするものであります。

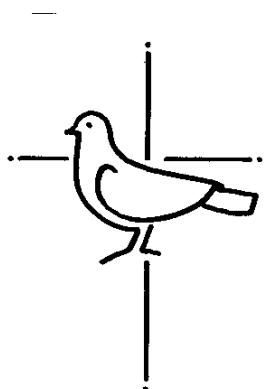
たとえばルカはその二部作である福音書と使徒行伝を通して、イスラエルの歴史のクライマックスとして来られたイエス・キリストを描き、さらに主イエスの復活・昇天後、その働きを継続する存在としての教会の働きを記述していきます。このようにして、読者であるテオピロや彼の属するキリスト者共同体（おそらくその多くは異邦人クリスチャンだったでしょう）は、自分たちの靈的ルーツを確認し、唯一の創造主であるまことの神の民としてのアイデンティティを確立することができたのです。

今日の日本のキリスト教会も、ある意味で「アイデンティティ・クライシス」に直面していると言って良いかも知れません。教会が一度立ち止まって自らのアイデンティティを確認・再確立することは、変わりゆく世界の中で変わることのない福音のメッセージを宣べ伝えていくために、どうしても避けて通れない課題であると思います。そのためには、単なる伝統回帰ではなく、教会を取り巻く現代世界の情勢を見極め、その中で神から与えられた使命にどう応答していくかを模索していく必要があります。

また、アイデンティティの自覚は、神の民として主から与えられた責務を再確認し、新たな奉仕へのエネルギーを生み出すと共に、時として他者との建設的な交わりを阻む否定的な結果を生み出すこともあります。私たちは狭い「キリスト教ムラ」の中だけで通用するような内向きの福音主義ではなく、「世の光、地の塩」としてこの世と積極的に関わりつつ、神のみことばを証しする教会になっていかなければならないと信じます。

日本の福音主義にはどのような「未来」が待ち受けているのでしょうか。それは神の恵みにより頼みつつ、与えられた責務を私たち一人ひとりがどう果たしていくかにかかっているのではないでしょうか。

（中部部会理事長）



福音主義神学会中部部会公開講演

「ルターの説教と牧会に学ぶ」

田上篤志

はじめに

わたくしは13年ほど前から『説教塾』で学びを続けています。その説教塾が、昨年11月に、東京代々木のオリンピック記念青少年センターで『説教塾シンポジウム』というものを行いました。オランダからヘルリット・イミンクという神学者をお招きし、4日間にわたって、世俗化の進んだ社会で伝道をしていくための実践神学の課題、とりわけ説教学の課題について集中した討議をいたしました。

そうした学びのなかで、今まであまり感じたことのなかった一つの体験をしました。そのシンポジウムで、これまで中心的な役割を担ってこられた加藤常昭先生は、最終日の礼拝説教を除いて講演や発題は一切なさりませんでした。そのかわりに、比較的若い、わたくしと同世代に当たる先生方が講演や発題をなさいました。

そのなかに金城学園大学の深井智朗先生、東京神学大学の小泉健先生といった大学で教鞭をとっている神学者の方がいらっしゃいました。お二人ともドイツの大学で博士号を取得され、いくつもの論文や著書を出されてもいます。深井先生は、わたくしと同じ1964年のお生まれです。

そのお二人の先生の講演は、いずれも学者らしい誠実さに溢れた、また明晰なものであったと思います。それを聞いて——これから神学の新しい営みは、こういう先生方によって担われていくのだろうな、とそのことを喜ばしく感じました。その一方で——自分は、あの先生方のようにはできないなあ、それは河馬が逆立ちをするよりも難しいことだ！ ということを今更ながらに痛感してもいたのです。

しかし、そのことは自分の置かれている立場を、しょせんはしがない地方教会の一牧師であると冷めた目で見つめていたというのではありません。神学の営みは、試験管の中で実証されるものではありません。どんなに優れた神学的論考であっても、たとえそれが聖書学のような分野であっても、学問の領域で論じられているだけでは意味を持ちません。伝道と牧会の現場である教会の実践でこそ神学の真価が問われる事を思いながら、神学の営みの最前線に立つ者としての自覚と誇りのようなを感じてもいたのです。

世の人々に向けて一所懸命にみ言葉を語りながらも、それがなかなか届かない現実に打ちひしがれ、ひとりの魂のために重荷を負い、時には自分のふがいなさを責めながらも教会の現場に踏みとどまりながら労苦している牧師に、上よりの望みを見出させ、その働きを吟味するための助けとして神学の営みがあるのではないかと思いません。

もとより現場の牧師もひとりの神学者ですが、賜物を活かしてより豊かな神学の営みを展開し、それを提供してくれる神学者をわたしたちは必要としているのではないでしょうか。そのような神学者のひとりとしてマルティン・ルターは、21世紀の今日においても普遍的な存在であることを思います。

I 説教者ルター

説教者ルターから学んだこと

説教者としてのルターを考える時に、真っ先に思い出す有名な話があります。ヴ

オルムスの帝国議会で、帝国アハト刑——帝国内において一切の権利を剥奪することを意味する刑——に処せられたルターは、その後ワルトブルク城に9カ月間にわたってかくまわれることになります。その間、ヴィッテンベルクの教会改革は大学の同僚カールシュタットとメランヒトンによって進められることになります。

しかし、カールシュタットの改革は熱狂主義者と結びついて過激化して修道院襲撃や聖像破壊といった混乱を引き起こし、事態収束のためにルターは懇願されてヴィッテンベルクに一時的に戻ってくることになります。そこでルターが混乱を鎮静させるために行なったことは8日間にわたる連続説教でありました。この一連の説教でルターは、神のみ前に立つひとりの人間としての信仰と、兄弟としての愛と奉仕を説きながら、神の言葉によって実現するキリスト者の内的改革を願ったのでした。

このことからわたくしは、神の言葉こそ真に教会を改革するものであることを、そして、神の言葉として聽かれる説教こそが一切の様々な働きや方策に勝って牧師の取り組むべきものであることを学びました。

事例——傷を負った教会の立ち直りのために——

7年前に服部喜望教会に赴任した頃、教会はあることが理由で傷を負っていた状態でした。教会から離れてしまった教会員が何人もいました。その中には役員経験者もいました。教会の雰囲気を理由に、伝道集会を開いても、そこに自分の家族や友人を安心して誘うことができないという声もありました。教会員の約半数が親族ということもいろいろと複雑な問題を生んでいました。また前任の牧師に対して批判的な教会員と、逆に肩入れする教会員とがいることもほどなく分かってきました。

こうした状況下で、わたくしはルターに倣う思いで主日礼拝の説教を語ることに集中しました。赴任した翌月からマタイによる福音書の『山上の説教』の連続講解説教を始めました。教会が立ち直っていくために『山上の説教』はふさわしい、また必要なテキストであるように思われたからです。

このテキストが教会を立ち直らせる神の言葉として聽かれるものとなるために、『山上の説教』を徹頭徹尾、福音として語ることに心を配る黙想を大切にしました。G・アイヒホルツやW・リュティ、R・ボーレン、加藤常昭といった人たちの書物や説教集が『山上の説教』を福音として語ることの良き参考と手本となりました。そうした書物の助けを借りることに躊躇しませんでした。福音を福音として、また福音による慰めを語らなければという強い思いがありました。ルターがいたるところで強調しています、恵みの神への立ち返りとしての悔い改めを抜きに真の改革はなし得ないということを思い出していたからです。

恵みへの立ち返りとしての悔い改めのためには、福音による恵みがしっかりと語られていなければなりません。それに逆行する、たとえば説教のなかで具体的な事例を挙げて糾弾することは決してしてはいけないと自分に厳しく禁じました。

み言葉の適応と称して具体的な行為や考え方を奨めることも避けました。教会の現状を作り変えることができるには、神の言葉によって教会員ひとりひとりが内的に癒され、それによって主への献身を新しくする以外にないことを信じ続けました。

赴任当初、平均28名の礼拝出席者数は7年後の今45名となり、教会の交わりにも朗らかさが生まれてきているように思います。こうしたことの全てが説教によって成し遂げられたわけではありませんが、説教が果たした役割は大きかったと思います。

ルターの説教をどのように学んだか

日本語に翻訳されて読むことのできるルターの説教を見つけては、それを買い求め、読むことをしてきました。とはいっても、2000を超える説教が現存しているといわれるルターの説教のなかで、日本語で読めるものはまことに僅かです。しかしそれ

でも、クリスマスとイースターの説教、ヨハネによる福音書第1～4章の説教、「山上の教え」による説教、七つの悔い改めの詩篇の説教、ガラテヤ書の講解、ヨナ書講解、また福音書のおもだつ箇所からの説教など、聖書講解も含めればそれなりの数になります。

こうしたルターの説教のなかから適当なものを選び、その説教全体を自分の普段語っている説教の言葉づかいに置き換えて作り直してみたことがあります。翻訳された説教は、翻訳者の意図でそうしているのでしょうかが、説教全体の語り口が「である」調になっていたりして、現実の説教の言葉づかいからすれば、かなり硬直した文章になっていることが多いからです。

長いセンテンスを短く区切ったり、文意を損なわない範囲でわかりやすい言葉づかいにしたりと、それをルターの原文ではなく訳文から行うのですから、学問的にはルターの説教とは言い得ないものにしてしまうことは承知の上です。

しかし、それをして書物のなかに冷凍保存されていたような説教が、ぬくもりを得た、生きた言葉として聴き(読み)とれるようになったことを思います。そうやって作り変えたルターの説教を、岡山県の大原教会在任中、祈祷会で朗読して紹介したとき、ひとりの老信徒が喜んでしみじみと言ったものでした。

——この時代に、こんな山の中でマルチン・ルターの説教を聞くことができて、ありがたいものですなあ！

こうしたことは、ルターの説教を咀嚼するトレーニングになっていたように思います。

説教作成で意識しているルターの説教の特徴

先ほど申し上げましたような方法でルターの説教に触れていますと、特に分析ということをしなくとも、ルターの説教の特徴といえるものが見えてくるようになります。そのなかで「対話的説教」「キリストを指し示す説教」「物語る説教」という三つのことが、わたくしの説教作成において影響を及ぼすものになっています。

1. 対話的説教

説教における対話的とは、単に、聞き手に話しかけるような語り口のことだけを指すのではありません。説教の中で頻繁に「愛する兄弟姉妹のみなさん」と呼びかけたり、「〇〇なのではないでしょうか」とレトリック上の問い合わせを繰り返している説教が、必ずしも対話的であるとはいえない場合も多いのです。

ルターの説教が対話的であるというとき、そこには確かに聞き手に語りかける口調も多いのですが、より重要なことは聖書の言葉に触れた聞き手の疑問や驚きをルターが汲み取って、それを説教に盛り込んで語っているということです。そうすることで、形のうえでは説教者ひとりが一方的に語る説教のなかで、語り手と聞き手の対話の関係が成立するのです。説教ではありませんが、有名な『キリスト者の自由』などは読んでいると引き込まれて行きます。それは読み手の心の反応をルターがよく考えながら文章を書いているからだと思います。

説教作成の最終段階に当たる原稿作成のときに、聞き手の反応ということを考えて文章を整えるようにしています。そのためには、黙想の段階で聞き手の置かれている状況をよく察しながら聖書テキストと向き合うことが大切なこととなってきます。

とはいって、教員ひとりひとり全員の状況を受けとめることはできません。ですから、聞き手としてのおもなモデルを設定します。たとえば、信仰歴の長い人・短い人、労働者、主婦、学生、高齢者、病者といったモデルを設定して、それぞれの立場に寄り添いながら聖書テキストと向き合う。そういうことをルターは行っているように思います。

2、キリストを指し示す説教

ルカス・クラナッハ(1472～1553)が描いた『説教をするルター』という有名な絵があります。その絵について徳善義和氏が次のように説明をしておられます。

「説教者ルター」の画は、説教者ルターの自己理解をはっきり掴みとった、説教の聞き手の芸術表現である。説教者ルターは、聖壇に立って、十字架のキリストを指しつづけ、自らもまた聴衆とともにそのキリストに注目するが、そのことは聖書の導きによってのみ可能だというのである(筆者註 ルターのもう一方の手は聖書を指すように描かれている)。



ルターの説教を読んでいると、実にしばしば「見なさい」「ご覧なさい」といった、キリストへの注目を促す言葉が語られているのに気づきます。

由木康の詞による讃美歌『馬槽のなかに』(讃美歌 121 番、讃美歌 21. 280 番)が「この人を見よ」と繰り返し歌うように、ルターは聞き手の心の目をキリストに向けさせることを大切にしています。

説教者というのは、聞き手がキリストを信じ、キリストに従って生きる者として成長することを願いながら説教を語るものですが、教員のなかには聖句そのものをありがたく受けとめていながらも、その聖句を語っているキリストがよく見えていないのではないかと思う人がいます。

聖餐を祝うときによく朗読されるマタイによる福音書第 11 章 28 節以下の「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」という慰め深い聖句にしても、呼びかけ招いて下さっているキリストに注目することがなかったら、キリストの言葉としてのみ言葉を聴いたことにならないかもしれません。

わたくしは説教の中で、「この言葉をお語り下さっているキリストの姿を皆さん的心に刻んで下さい」と語ることがよくあります。また「このことを語られているキリストの声の響きはどんなものであったでしょう?」と問い合わせることもあります。

ごく最近の説教でもマタイによる福音書第 23 章 13 節以下に記されている「あなたたち偽善者は不幸だ」と繰り返し語られているキリストの言葉は、単なる糾弾ではなくて、呻きであるという釈義をもとに、「主の呻く声が聞こえますか、その声を聞き取りましょう」ということを語りました。そうしたことも、キリストを指し示し、キリストご自身の言葉を聴き受けとめることを願ってのことです。

キリストを指し示すルターの説教は、旧約聖書の説教についても同じことが言えると思います。たとえば創世記の第 3 章に「原福音」を読み取ったり、旧約聖書の出来事を予型論的に解釈することについて現代の聖書学者(たとえばフォン・ラート等)は否定的ですが、こうした解釈をルターは退けてはいないように思います。それは、ルター自身が現代の聖書学を知らずに古代教会の解釈の中に生きていたからという理由だけではないように思います。旧約聖書のテキストを単に過去の出来事としてだけ説くのではなく、今を生きる者たちへの神の言葉として語ろうとするとき、受難と復活を遂げられたキリストを語ることがなければ、旧約聖書のテキストが今

を生きる者たちに対する生きた神の言葉として響きを立てることができないとルターは考えていたのではないかと思います。

また、新約聖書各書の著者による旧約聖書からの引用とその解釈についてもルターはそれらを積極的に受けとめ、旧約聖書とキリストとの関係を説くことを大切にしているように思います。

3、物語る説教

(1) キリストの姿や言葉そのものを丁寧に語る

キリストはどのようなお方であり、何を語り、何を行って下さったのか。また、今もわたくしどもを招き導こうとしていられるキリストのことを語ろうとするとき、その語り口はどのようなものがふさわしいのかということが説教の文体についての問い合わせとなります。キリストについての実際に起こった出来事、また今まさに起こっている事実を語ることからすれば、物語る文体というものが説教にはふさわしく有効であることを思います。

その点、わたくしが神学校で教えられてきたスリーポイント説教は、その有用性を承知してはいますが、へたをすると順序よく分かりやすく書かれている電化製品の取扱説明書のような文体になってしまることがあるのではないかと思うことがあります。そういう説教は話としてはよく分かっても、あまり聞き手の心を動かしません。キリストの声を想う心の動きが起き難いのではないかと思うのです。

そのことは言い換えると、説教者が福音書に記されているキリストの前をあまりにも簡単に通り過ぎてしまい、キリストそのものを語ることが薄っぺらになっているということです。

ルターが特に福音書からの説教で物語るように語るとき、それは母親が子どもに物語を語るような語り口でという意味もあるのですが、より重要なことは、キリストの姿や言葉そのものを丁寧に語っているということです。

聖書に記されている出来事の背景や聖書原文からの深い読み取りなどを、ひとつひとつ説明して聞かせるというのではなく、そうした聖書研究、釈義をしっかりと踏まえたうえで、事柄を物語って聞かせるという面がルターの説教の随所に見られます。

(2)キリストの言葉を説明ではなく神の言葉として語る

キリストを説明するのではなく物語ることで、神の言葉をより明確に語る可能性が大きくされることを思います。たとえば、キリストの言葉について

一一〇節にありますように、キリストは「〇〇〇」とお語りになりました。その言葉の原文には〇〇という意味があり、その真意は〇〇ということにして……といったふうに、キリストの言葉を説明する語り口になっていることが多いのではないでしょうか。しかしルターはこうした語り方よりも、もっとストレートに

——キリストはこうおっしゃっているのです、あるいは、

——キリストはこうおっしゃっているかのようです、と前置きをして、キリストの言葉の釈義を踏まえながら、キリストの言葉を丁寧に語りなおして聞かせるのです。

もっともこうしたレトリックには危険もあるでしょう。キリストの言葉を必要以上に拡大、類推してキリストの真意ではない事柄を「キリストはこうおっしゃっているのです」と語ることになれば、とんでもないことです。そうならないためには、神の言葉として語る際に注目される聖書テキストについての釈義はもとより、そのテキストが教会の歴史においてどのように受けとめられ解釈してきたかという聖書研究や教会の信仰(教義)による吟味が大切な課題となります。

もっとも、ルターほど大胆にキリストの言葉を語りなおすまでに至らなくても、キリストの言葉を物語ることで神の言葉としての語りに近づくことはできると思います。たとえば、

——キリストは「〇〇〇〇」とお語りになりながら、皆さんを招かれるのです。と語るところを

——キリストは皆さんを招いて語られるのです。「〇〇〇〇！」というふうに語り変えるだけでも、テキストとしてのキリストの言葉が、神の言葉としての響きを立てやすくなるように思います。

スリーポイント説教が万能ではないように、物語る説教もまた万能ではありません。原文の意味などは咀嚼して物語の中に組み込んでしまうより、やはり説明として語る方が聞き手に届くことがあるように思います。

そうした点を聞き手の反応を観察しながら、一方でルターの説教に見られるように物語る説教の有用性を学び、それに倣うことができれば、説教者としてより豊かな語り口を獲得することになると思います。

II 牧会者ルター

人々の魂を慮るルターの姿

何故ルターは改革運動を起こさざるを得なかつたのかという理由を知ることは、鮮烈な印象をもって牧会者ルターを知ることでもありました。

ルターによる改革運動は、神学的論争そのものが原因であったとか、当時のローマ・カトリック教会を糾すことを直接の目的にしていたというのではなくて、ルターの牧会する教区内の人々への牧会的配慮の必要から起つたといわれています。徳善義和氏は、牧会者ルターの心を痛めた具体的な状況を次のように著しておられます。

選帝侯フリードリヒはヴィッテンベルクにおけるテツツェル（筆者註　ドミニコ会修道士で、贖宥券販売を委託されていた名うての説教者）の贖宥券販売を認めなかつたので、テツツェル一行は、選帝侯領の境界にとどまっていたが、人々のうちには、一行のところまで赴いて贖宥券を求める者も出る始末であった。テツツェルは言葉巧みに、贖宥券を買うことによって完全な赦免と煉獄からの解放ばかりか、現に煉獄にいる死人も赦免を得ることができると保証していたのである。ルターは教区司祭として、事態を黙視するに忍びず、ここに、1516年7月27日（三位一体後第10主日）に、説教の中でこれに対する見解を公にせざるを得なくなつた。これが贖宥に対する、公になされたルターのはじめての意思表示であった。そこにおいて——中略——ルターは、贖宥のもたらす誤った確かさと、倫理上の弛緩に対して警告を発したのである。

（『ルター著作集第1集第1巻』より徳善義和氏の解説文　聖文舎1964年　26頁～）

こうした牧会者としてのルターの姿を知ることで、魂への配慮としての牧会を印象深く受けとめ、牧師である自分の働きの意味と重大さを自覚してきたように思います。

赦罪の恵みへの立ち返りを促す牧会

ルターが魂の配慮を実際にどのように行っていたのかを知る手掛かりとして手紙があります。手紙による牧会と言い得るほどに、ルターは牧会的な手紙を書き送ることで、様々な具体的な状況下で悩み、苦しみ、恐れおののいている魂を慰め、励ま

しているのです。そうした手紙を読むことで、ルターが牧会で何を大切にしていたかが浮かび上がります。

そのなかで特に強い印象をもって受けとめたことは、ルターが神の恵み、とりわけ赦罪の恵みへの立ち返りを重視していることです。十字架による赦罪の恵みこそは、如何なる状況に置かれている魂を配慮する場合においても基本であり、そこからしか魂が正しく平安を恢復することはできないと考えるからです。

この赦罪の恵みをルターは、神の言葉の約束を根拠に、また聖礼典の客観的な事実(眞実)を示しながら、噛んで含むような丁寧さで説き聞かせる手紙を書いています。ルターの手紙は、ありきたりの常套句ではなく、相手の魂に届く言葉を紡ぎ出すようにして書かれています。それは手紙としての説教とも言えるものです。

その説き方は、やさしく懇ろに説かれることがあれば、厳しく対決するかのように説かれていることもあります。いずれにしても、魂の配慮を必要としている相手と一対一で向き合っているルターの真剣な姿勢を手紙から読み取ることができるのです。

事例——聖餐をめぐっての一対一の対決

礼拝で聖餐を祝いましたときに、ひとりの婦人の教員が聖餐を受け取りませんでした。礼拝後、その理由を尋ねると、自分のような者は聖餐を受けるにふさわしくないという意味の返事をされました。聖餐制定句にあるように「自分を吟味して」ということからすれば、神の恵みにふさわしくない自らの生活や具体的な罪を振り返ることはあってしかるべきであろう。そして、洗礼を受けてからもなお赦しを必要としている己を知ることもある。そうであるならば、そこでこそより一層、我々のために死のみ苦しみを受けて下さったキリストの贖いを信頼すべきではないのか、ということを語り聞かせました。しかし、その婦人は頑として自分は恵みにふさわしくないと主張し続けました。

そのとき私は意を決しました。——ここはひとつ対決をしなければならない！そして一対一の対話が始まりました。その対話をしている間も、私の心にはルターの手紙の言葉が響いていました。そのときのわたしの語調は、今思うとかなり強い、厳しいものであったと思います。しかし、その婦人は最終的に改めて聖餐卓の前に立ち聖餐を受けました。ずっと後になって——あの時の先生の厳しさは自分にとつて慰めになっていました、と言つてくれました。

事例——きよめではなくて十字架のキリストを

感情的になると自分の思いを吐露し、他の教員を傷つけてしまうひとりのご高齢の教員がいました。根は素直な人なので、後になって自分の言葉が不適切であったことを謝るのですが、その度に繰り返して言うことがありました。

——わたしはきよめられていないからこういう失敗をする。きよめの恵みが足りない。もっときよめられなければならない、と言うのです。

その教員とも一対一の対話をし、十字架による赦しの恵み・信仰義認の恵みに立つことを徹底して語ったことがあります。み苦しみを受けて下さったキリストに心の目を集中するところに、我々の唇もまたきよめられ、相手をさばき責める言葉を捨てることができる。ただ漠然と聖霊の満たしを求めるのではなく、十字架にかかるれたキリストの心を我が心とすることができますようにと共に祈りました。

「きよめ」を強調する教派においては、赦罪の恵み(義認)ときよめ(聖化)とが分離する傾向があります。その結果、十字架による赦罪の恵みは後退し、「きよめ」という言葉だけが先行するようになってしまいます。

また、聖礼典の客観性よりも、聖霊を受けたとか聖霊に満たされたといった靈的体験をもって恵みの事実を確認しようとするようになります。

個人の信仰体験自体は否定すべきものではありませんが、体験や感覚を土台にするのではなく、かえってそうした体験や感覚に逆らうようにして、ルターは十字架の出来事と神の言葉の約束に心を向けさせる配慮をしているといえます。そうしてこそ、恵みに立ち返る悔い改めと共に、受難の僕となって下さったキリストに倣う悔い改めが起こるといえましょう。こうした悔い改め自体が聖霊の恵みによるものであることをルターは重視していますから、決してルターの牧会は聖霊の働きを軽視したものではありません。

いわゆる「義認と聖化」の捉え方は魂の配慮にも大きな影響を持つものであるだけに、ルターの義認と聖化の捉え方、また「義人にして同時に罪人」といった理解は、わたしにとって魂の配慮の筋道をつくる基本となってきたことを思います。

牧会者であり続けるために

ルターが1530年に記されたとされる『結婚問題について』という文書があります。数あるルターの著作のなかにあって、それほど有名なものではないと思われますが、結婚問題という今日のわたしたちにとっても牧会上のひとつの課題となる事柄だけに、『ルター著作集第1集全10巻』のなかから、この題名を見出したとき、早速興味深くこれを読みました。

そのなかでルターは、結婚問題そのものについて、これをさばき判断するのは帝国の法と判事がすることであり、牧師は結婚問題の当事者の良心に関わること——それは魂の配慮と理解してもよいでしょう——を自らの領域とすべきであるということを述べています。そして、牧師の領域外のことに関わると「歯車が我々の袖を巻き込む」ように、そのことに引きずり込まれて、本来の務めを妨げさせてしまうことになるので慎重にすべきであるという意味のことを述べているのです。

この文章を読みながら、同じ神学校で学んだ友人が、卒業後ある教会の牧師に就任しながらも、数年後、牧師を辞めるに至ったことを思い出していました。その友人は教会員の結婚問題——離婚しそうな夫妻の関係——のことで深く悩んでいました。たいへん真面目な、また面倒見の良い人でしたから、そのことが悩みをより深めていたのではと思います。それが直接の原因であったかどうかは本人に尋ねることはしていませんが、その後まもなくしてその友人が牧師を辞めていたということを知りました。悩んでいた友人のために何もしてあげられなかったことを悔やむとともに、あの時の友人に、このルターの文章を紹介できていたらということを思いもするのです。

事例——牧会者本来の働きと友人としての助言

癌などの深刻な病気を発症した教会員やその家族が、わずかな可能性に期待を寄せ、医療機関を探し回ったり、サプリメントなどを紹介されたりしている様子を見ることがあります。自分の体験が役に立つのではと思い、より良い病院を紹介してあげたほうがよいのではないかとか、今診てもらっている医師の所見とは違った別の医師の所見を教えてあげることが励ましになるのではないかと考えたりするときに、ルターの「歯車が我々の袖を巻き込む」という言葉を思い出しては、牧師として魂の配慮に専念すべきことを自分に言い聞かせてきました。

病者への魂の配慮という課題に向き合うだけでもなすべきことはたくさんあります。治療のことや医師の診察・所見などの詳しい話にも丁寧に耳を傾けながら——医学の領域における働きの重要性を受けとめながら——牧師として魂の領域においてなすべきことを欠くことがないよう気を付けてきたつもりです。

その上で具体的な相談を求められたり、助言としてなら語ることが許されるだろうと判断したときは、あくまでも牧師としてではなくて友人としての助言であるということを断りながら助言をすることはありました。また、そうした助言について、

わたしが直接するのではなくて妻から言ってもらうこともありました。

もし、病院や治療方法、薬などのことについて、牧師としての意見や判断、勧めとして語ることをしたとして、その勧めが良い結果につながらず、かえって悪い結果を生むことになればどうなるでしょうか。勧めた側の心はその責任の重荷を負うことになるでしょう。また、勧めを受け、その通りにした側も置かれている状況が厳しいときなどは、勧めをした相手に対して不信感や不満を抱くことになりかねないでしょう。その不信感のゆえに、牧師としての本来の働きである牧会的対話に、いささかでも影を落とすことになれば、それは魂の配慮にとって大きな痛手となってしまいます。

説教の言葉と牧会的な対話における言葉を、相手に信頼感をもって聴き取ってもらえるようにするためにも、牧師が領域外の事柄について発言することは、たとえそれが相手のためを思ってのことであっても慎重にすべきことをルターの文書から学んだのです。

さいごに——どのようにルターから学んだか——

「ルターの説教をどのように学んだか」というところでも少し触れましたが、その学びのことをもう少し詳しく申し上げて、これからルターを学んでみようと思われる方の一助になればと思います。

作家の大江健三郎さんは大学在学中に作家としての道を歩み始められた方ですが、恩師でありますフランス文学者の渡辺一夫氏は、学者としてではなく作家として活動していこうとしている大江さんにある学びの方法を教えられたようです。その方法を大江さんは実際に続けてこられ、それが作家としてのご自身の活動のために大いに役立っているということを次のように記していられます。

大学を卒業するとき、これからのかみの独学の方法だ、といって渡辺さんに本の読み方を教わった。それは3年ごと、新しく読みたいと思う対象を選んで、その作家、詩人、思想家を集中して読むという方法です。そうしますとね、ずっと読んでいるものに影響されずにはいない。そして自分が新しい言葉の感覚を発見していく。そういうことが起きるのです。

(大江健三郎『読む人間 大江健三郎 読書講義』集英社 2007年 71頁)

大江さんがひとりの文学者に集中して3年間、その人の書いたものを読むといわれるとき、数冊の本というのではなく、その文学者の全集を読むというぐらいのことが意味されているようです。

振り返ってみると、わたしがルターの著作及びルター関係の本を読み始めたのは、神学校入学の1年ほど前から始まって、それからだいたい10年ぐらいは、読む本の8割ぐらいはルターだったように思います。周囲から一一偏っているのではないか、もっと他の人の本も読んで広く学んだ方がよいのでは、といわれることも度々でした。

しかし、地道に10年間ルターを読み続けてきたことで、ルターの神学を体で覚え学んできたように思います。

『ルターの神学概論』(ピノマ著 石井正巳訳 聖文舎1968年)のようなルターの神学を体系的に解説してくれている本も読みました。それはルター自身の著作を読むときの助けになりました。信頼できる人が書いたルターの著作の解説に助けられながら、ルターの著作そのものをこつこつと読み続けることで、ルターの息遣いのようなものを感じができるようになってきました。そのくらいになってはじめて、ルターの真似を試み、読んだことが自然に説教と牧会の実践に影響を持つようになって来ていたことを思います。

私がルターの著作に触れる時、それは日本語に翻訳されたものに限られています。いろいろな人が翻訳しているのですから、その訳文の文体には多少のばらつきがあります。しかし、それでも10年間ルターを読み続けているうちに、こうした日本語に訳されたルターの文章からでも、ルターらしい言葉づかいが感じられるようになってきたのです。「一つのものに偏らないで広く学ぶ」ということは確かにそうでしょうが、一つのものを学ぶには、息の長い、集中した学びが必要ではないかと思います。各教派の神学者の本を一冊ずつまんべんなく読んだとして、果たしてどれだけのことが身につくでしょうか。学んだことが単なる知識ではなくて、実践に結び付くようになるためには、影響力をうけるほどに惚れ込むことも必要だと思います。

もちろん、そこで自戒しなければならないことがあります。その影響を与えてくるものを絶対化・神格化しないということです。その意味で、ルターの考え方を全面的に受け入れているわけではありません。

実は今、私はルターをあまり読んではいないのです。10年ほど前からカール・バルトを読み続けて今日に至っています。難解といわれるバルトの文章ですが10年も付き合っていると、それだけで親しみを感じますし、分かったような気がしてくるのです。殊更にバルトという名前を出さなくても「神の言葉の神学」に生きたバルトの時にユーモアを込めた文章に触れる時、伝道に生きる自由と喜びが息を吹き返すことを思います。

しかし10年間というスパンは少々長すぎるでしょう。読書の集中力が少し衰えてきているかなと思う最近ですが、5年サイクルぐらいで、この度のことを機に、またルターを読んでいこうかなと思っています。

(日本イエス・キリスト教団服部喜望教会牧師)

[引用の文献以外の参考文献]

『宗教改革著作集3巻・ルターとその周辺1』 490頁～徳善義和氏の解説（教文館1983年）

『M・ルター キリスト者の自由 全訳と吟味』徳善義和訳著 78頁～神の言葉が魂を自由にする
(新地書房1985年 現在、教文館から復刊)

『世界説教・説教学辞典』 545頁～ルターの項目(日本基督教団出版局1999年)

『牧会者ルター』石田順朗著 20頁～ (聖文舎1976年 現在、日本基督教団出版局から復刊)

『ルターと聖書』コーラン著 314頁～ (聖文舎1971年)

『ルターの聖書解釈』ペリカン著 66頁～ (聖文舎1970年)

(注) 付属資料として下記の文献内容が公開講演会で提供されましたが、ここでは省略いたしました。

①「マルティン・ルター説教・マタイによる福音書第15章21～28節、1527年受難
節第2主日」、『ルター選集2・ルターの説教』 岸 千年編訳 聖文舎1977年

②マルティン・ルター説教「ヨハネによる福音書第16章5～15節、『説教黙集成2・
福音書』 加藤常昭編訳 教文館2008年

③「マルティン・ルターグオルク・シュペンラインへの手紙」1516年4月日、『ルター
の慰めと励ましの手紙』T・G・タッパート編 内海 望訳 リトン2006年

エイレナイオスの聖霊理解の一側面

『異端反駁』第4巻における「知恵」としての聖霊の働き

大庭貴宣

1. エイレナイオスの生涯と著作

エイレナイオスの生涯については、多くのことが知られていない。けれども、エイレナイオス自身が180年代にギリシャ語で記した『偽りのグノーシスの暴露と反駁』(通常『異端反駁』(Adversus Haereses) と呼ばれている。以下AH) の3.3.4でスミュルナの司教であるポリュカルポスについて触れ、「そしてまたアジアにおいて、使徒たちによってスミュルナの教会の司教に任命されたこの人（ポリュカルポス）を、私たちは幼い頃に見たことがある¹。」と記している²。この記述を受けて、大貫隆は、「従つて、スミュルナが彼の生地であったか否かは別としても、その地で幼少期を過ごしたことは確かと思われる。その生年についての諸説あるが、ポリュカルポスの殉教年（通常155-156年とされる）やその他の関連から推して、140年から遡ることそう遠くない頃と考えるのが妥当ではないかと思われる³。」と記している。

そして、リヨンの司教ポテイノス (Poteinos 177/178年没) の殉教の後に、後継者として司教となり、皇帝セウェルス (Lucius Septimius Severus 在位 193年-211年) の迫害時 (202年) に殉教したと伝えられている⁴。

また彼の著作は、現存するものとしては、『異端反駁』(全5巻) と『使徒たちの使信の説明』があり、散逸してしまった著作はエウセビオスの証言から知ることができる。「『知識について』と題された簡潔ではあるがきわめて説得力のあるギリシャ人論駁の文書や、兄弟のマルキアヌスに献呈した『使徒の教えの証左』と題するもの、そして、さまざまな説教の小冊子などである⁵。」

2. 「神の両手」のモチーフの源流——アンティオケイアのテオフィロス⁶の影響——

エイレナイオスの聖霊理解を論ずるにあたり、欠かすことの出来ない重要な神学的トピックに「神の両手」の働きが挙げられる。「神の両手」という表現自体は、エイレナイオス独特のものではない⁷。エイレナイオスの「神の両手」の理解における固有性は、「神の両手」である「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」として同一視し、それらを置き換えたことにある。エイレナイオス以前の、「神の両手」という表現を用いている著作として知られている『クレメンスの手紙——コリントのキリスト者へ(1)』33.4-5には次のように記されている。

とりわけ、その聖なる、非の打ちどころなき御手で以って、創造物中最も傑出した、また最も偉大なるもの——人間を、ご自分の似姿に形どって造られた。なぜなら、神のこのように言われる、「我々は、我々の肖像通りに人間を造ろう」と。そして神は人間を造られた。人間を男と女とに作られた（創世1・26-27）⁸。

確かに、『クレメンスの手紙』には「御手」という言葉が出てくる。けれども、そこには、「御言葉と知恵」また「御子と聖霊」というように区別はされてはいない。「神の両手」がエイレナイオスにおいて重要となってくる理由は、あくまでも、エイレナイオスが「神の両手」を「御言葉と知恵」とし、さらに、「御子と聖霊」として同一視したということの独自性に見出すことができるのである。

それでは、エイレナイオスが独自の「神の両手」の理解を持つに至った背景にある「神の両手」のモチーフは、一体、どこから導き出されたものであるのか。エイレナイオスの「神の両手」の理解のために、まずこの点について簡潔に述べることから始めたい。

そのために、エイレナイオスが「神の両手」をどのように表現しているのかを確認する必要がある。エイレナイオスがAHにおいて、初めて「神の手」について言及するのはAH3.21.10においてである⁹。そこには「神の手」としての「御言葉」が創造の業に参与したことの言及を見つけることができ¹⁰、「神の手」と「御言葉」を最初に同一視した箇所がある¹¹。AH3.21.10には、

ちょうど、最初に造られた人であるアダムは、「まだ神が雨を降らさず、人が地を耕していなかった」未開墾の地、そして処女[地]から存在を得て、そして、神の手、即ち、神の御言葉によって形造られた。「すべてのものが彼によって造られ[ヨハネ 1:3 参照]、そして、主は地からちりを取り、そして人を形造られた¹²。」

エイレナイオスが、一体、どこから「神の両手」のモチーフを得たのかについては、Briggmanが、「御子と聖霊、あるいは御言葉と知恵としてエイレナイオスが識別した神の2つの手の教えは、Friedrich Loofsが、エイレナイオスによって発展した小アジアからの伝統に属するモチーフであると示唆して以来、しばしばエイレナイオスの神学の一部と取り扱われてきた¹³。」と紹介しているように、これまで様々な研究が成されてきた¹⁴。それらの研究を整理した上で、Briggmanは、エイレナイオスが、アンティオキアのテオフィロスから「神の両手」のモチーフを得たことを示唆している¹⁵。また、Denis Minnsもエイレナイオスが「神の両手」としての神の御言葉と知恵の描写がテオフィロスに由来しているように思われる記している¹⁶。

おそらくエイレナイオスが影響を受けたと思われる箇所が、テオフィロスの『アウトリュコスに送る』の第2巻18項に存在する。その箇所でテオフィロスは次のように述べている。

人間の創造に関して言えば、造られたことは人間によっては語りえないが、神の書物はそれに簡単に触れている。つまり神が「われわれにかたどり、われわれに似せて、人間を造ろう」(創1:26)と言ったことで、それはまず人間の価値を明らかにしている。というのは、すべてを言葉によって造った神はすべてを付隨物とみなしているが、人間の創造だけは自分の[両]¹⁷手にふさわしい作品と考えているのだから。しかも神はあたかも助け手が必要であるかのように「われわれは[われわれに]似せて、人間を造ろう」と言っているのが見られる。しかし神はほかの何かに向かってではなく、まさに自分自身の言葉と自分自身の知恵に向かって[われわれは造ろう]と言ったのである。人間を造り、殖えて地に満ちるように祝福して、神は万物を人間の下に僕として置き、人間に最初から地の実と種と草と果実から食物を摂るように命じ、動物たちにも人間と同じものを食物とし、地のすべての種から食べるよう命じたのである¹⁸。

続けて、第2巻19項では

「これは天地創造の由来である、神が天と地を造られたとき、野のあらゆる木はまだ生じておらず、野のあらゆる草はまだ生じていなかった。というのは、神が地に雨を降らせず、地を耕す人もいなかつたからである」[創2:4-5]。こ

うして聖なる書物は、かの時には全地が神的な泉によって潤され、地はそれを耕す人間を必要とせず、地は神の命令によって自動的にすべてのものを生じさせ、人間が地を耕して倦むことはなかったということをわれわれに告げ知らせたのである¹⁹。

Briggmanは、「エイレナイオスの、神の手としての御言葉の初めの同一視は、テオフィロスのこの個所²⁰に従っている²¹。」との見方を示し、先に見たエイレナイオスが初めて「神の手」と「御言葉」を結びつけた AH3.21.10 と『アウトリュコス』第2巻18-19項を関連づけて考え、AH3.21.10 のうちに、テオフィロスの影響があることを述べている²²。

その理由としては、例えば、AH3.21.10 と『アウトリュコス』2.18-19 は、同じ聖書箇所を引用している。まず「御言葉による人間の創造を支持するために、どちらの著者もヨハネ1:3を用いていること」を挙げている。テオフィロスは「すべてを言葉によって造った神」と記し、エイレナイオスもまた「すべてのものが彼によって造られ」と記している。さらに、テオフィロスは『アウトリュコス』2.18-19 に及び、人の創造について詳しく述べている。同じように、エイレナイオスも、「未開墾の地、そして処女「地」から存在を得て」とアダムが存在するようになった描写をしている。また両者ともに創世記2:5²³からの引用を用いている。『アウトリュコス』2:19では、「神が天と地を造られたとき、野のあらゆる木はまだ生じておらず、野のあらゆる草はまだ生じていなかった。というのは、神が地に雨を降らせない。地を耕す人もいなかったからである」[創2:4-5]と引用され、AH3.21.10 では、「まだ神が雨を降らさず、人が地を耕していなかった」と引用されている²⁴。

このような共通性を考慮した場合、これを単なる偶然の一一致と見るのでなく、Briggmanが指摘しているように、エイレナイオスが、テオフィロスの『アウトリュコス』から「神の両手」のモチーフを得たこと、そして、その影響が AH3.21.10 に表れていると考えることの方が妥当であると思われる。

以上のように、エイレナイオスがテオフィロスの『アウトリュコス』から「神の両手」のモチーフを得たということを確認した。ここから起きた疑問は、「エイレナイオスは、一体何の目的のために、テオフィロスから『神の両手』のモチーフを得たのか。」という問い合わせである。

エイレナイオスがテオフィロスから「神の両手」のモチーフの影響を受けたということは確かに重要なことではある。しかし、より重要なこととして考えなければならないことは、エイレナイオスが「神の両手のモチーフを用いて、何を表現しようとしたのか」ということである。もし、エイレナイオスが、テオフィロスから単に「神の両手」という用語だけを得たのであれば、エイレナイオスにおける「聖霊論」は発展していなかったとも言うことができるのではないだろうか。実際に、エイレナイオスはテオフィロスから「神の両手」のモチーフを得た後、彼独自の聖霊論を展開することになる。それが、「神の両手」の片手である「知恵」を「聖霊」と置き換えたことから始まっている²⁵。これは同様に、「御言葉」と「御子」と同一視したことでも関連している。

この「神の両手」としての「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」に置き換えたことについての理解も、テオフィロスの『アウトリュコス』とエイレナイオスの『使徒たちの使信の説明』(以下『証明』)を比較することで、より明確になる。『アウトリュコス』1.7には次のように記されている。

神はその言葉と知恵によって万物を造った。なぜなら、その言葉によって天が、またその靈によって天のすべての力が堅くされたからである[詩33:6]。彼の知恵は最も力強い。神は知恵のよって地の基を置き、叡智によって天を

備え、知識によって深淵を分かたれ、雲は露を滴らせたのである〔箴言3:19-20〕²⁶。

これに対して、『証明』第5章では、

神は理性的存在である²⁷から、すべての被造物をその御言葉によって造り出した。また神は靈であるから、すべてのものをその靈によって形づくった。預言者も『主の御言葉によって天は据えられ、[諸天]の力はすべて〔主〕の靈によって造られた』〔詩33:6〕と言っている。したがって、靈が種々な『力』を配分し、形を造るのに対し、御言葉は『据える』、つまり物質に働きかけて、存在を与えるから、御言葉が子と呼ばれ、靈が神の知恵と呼ばれるのは、妥当であり、的確なことである²⁸。

このように、テオフィロスは「靈」を「知恵」と同一視しているのに対し、エイレナイオスは、「御言葉が子と呼ばれ、靈が神の知恵と呼ばれるのは、妥当であり、的確なことである。」として、「御言葉」と「御子」に、そして「知恵」と「聖靈」に置き換えていていることが分かる。

これまで見てきたように、エイレナイオスはおそらくテオフィロスから「神の両手」のモチーフを得た。そして、「神の両手」としての「御言葉と知恵」を、「御子と聖靈」に置き換えてている。つまり、これは父なる神の両手として、御子と聖靈が共に存在していることを示しているのである。このことは2つの点において、非常に重要である。1つは、殉教者ユスティノスなどに見られた「二位一体」を越えることに繋がっていること²⁹でありもう1つは、エイレナイオスが「神の両手」としての「御子」と「聖靈」を区別したことによって、それぞれに固有の働きを発展させていくことになるという点である。

つまり、エイレナイオスの「聖靈論」が1つの形を持つに至ったのは、「神の両手」のモチーフの「御子」と「聖靈」の置き換えから始まっているとも言うことが出来るであろう。では、エイレナイオスが「神の両手」を「御言葉と知恵」から「御子と聖靈」と置き換えたことにより、どのような聖靈の理解が展開されていくのであろうか。この点を次の章で取上げることにしたい。

3. 「知恵」としての聖靈の働き——AH4. Pref. 4 と AH4. 20, 1 を中心として——

3. 1 御子と聖靈によって

前の章で見たように、AH3. 21. 10においては「神の手」としての「御言葉」の働きに限定されていたが、AH4. pref. 4において、これまでとは異なった展開を見ることが出来る。AH 4 . pref. 4 には、

事実、人は魂と肉の結合であり、人は神の類似性に従って造られ、そして彼の両手によって、即ち、子と靈によって形成され、彼は彼らに「人を造ろう」と語った³⁰。

と記されている。このように、エイレナイオスはこの個所で初めて「神の両手」を「子と靈」と言い換えている。そのため、エイレナイオスの「神の両手の『知恵』としての聖靈の働き」は、『異端反駁』の第4巻から展開されていくと考えることが出来る³¹。

先に見たテオフィロスの『アウトリュコス』2. 18においては、「自分の〔両〕手」、それを「自分自身の言葉と自分自身の知恵」と記していた³²。確かに、テオフィロス

は、「神の両手」としての「御言葉」と「知恵」という概念を持っていた。そしてまた、この「両手」によって人が創造されたという神学を持っていたとも考えることができる。けれども、テオフィロスは、エイレナイオスのように「神の両手」を「子と靈」というように区別をすることも、また、それぞれの働きの違いについて明瞭には語るということもしてはいない。つまり、ここにテオフィロスとエイレナイオスの違いが起こっており、この「御子と聖靈」という言い換えのなかにこそ、エイレナイオスの独自性が表わされているということを言うことができるであろう。

エイレナイオスが「神の両手」を「子と靈」と置き換えたことについては、鳥巣義文は次のように語っている。「ここでテオフィロスは、明らかに『神の両手』を神の『ことば』と『知恵』として理解している。そして、創世記第1章26節において神が語ったとされている相手こそ、この『ことば』と『知恵』であると捉えている。さて、こうしたテオフィロスの理解と、われわれが先に指摘したエイレナイオスの用語の置き換えの傾向、すなわち『ことば』と『知恵』を『子』と『靈』への置き換える傾向とを比べるならば、われわれは、この操作自体は、エイレナイオス自身の発想によるものと考えができるのではないかろうか³³。」と説明し、また「その『両手』とは、『ことば』と『知恵』であり、エイレナイオスは、それらをことさら『子』と『靈』に交換している。この置き換えはどう理解されるべきであろうか。果たして、ここには明白な神学的意図が作用しているのであろうか。われわれとしては、この置き換えの中に、既にエイレナイオス固有の聖靈論が表現されていると考えることができよう³⁴。」と説明を加えている。

それでは、なぜエイレナイオスはテオフィロスから受けた「神の両手」のモチーフをわざわざ「子と靈」と言い換え、「神の両手」による創造を語るのであろうか。Briggmanは、エイレナイオスがこの箇所で「神の両手」つまり「子と靈」による人の創造を語っていることの理を、「グノーシス主義の『肉の救いの軽視』に対する反論であることは明白であり、エイレナイオスは、『肉』が人の一部であり、不完全なデミュルゴス³⁵による創造ではなく、唯一の創造主である『神の両手』によって造られたものであることを示している」と述べている³⁶。このグノーシス主義の「肉の救いの軽視」に対する反駁こそ、まさにエイレナイオスの目的であり、そのためにAH4において、「神の両手」の働きを、「御言葉と知恵」を「子と靈」に置き換え、人が「神の両手」である「子と靈」によって「肉体」を含めたものとしての造られたことを明示しようとしたのである。このエイレナイオスの人間理解は AH5.9.1 に見ることが出来る。そこには次のように記されている。

私たちが示したように、完全な人とは、肉、魂、そして靈の3つのものから成ることを理解していないからである。そして、そのうちの1つは救いを形づくるものである。それは聖靈である。別なものは、救われ、造られるものである。それは肉である。もう1つは、前の2つの間である。それは魂である³⁷。

つまりエイレナイオスにおいては「肉」と「魂」と「靈」の3つから成るもののが「完全な人」であると考えられている。「肉」は神が造られたものであるので、当然、完全な人間の要素となるものである。このように、エイレナイオスは、「神の両手」による人の創造を考え、それを主張しており、そのことが、エイレナイオスの聖靈の神学を発展させたとも言えることがあるであろう。なぜなら、[脚注 27において記したように]、テオフィロスには「知恵としての御言葉」の同一視も見られていたのであり、これは、エイレナイオスがテオフィロスから「神の両手」のモチーフの影響を受けたけれども、テオフィロスとは異なった聖靈の理解、即ち、「神の知恵」としての「聖靈」の働きを形成させ、さらに発展させることに至ったと考えられる。

3. 2 「かたち」と「類似性」に従って

それでは、その発展はどこに見られるのであろうか。AH4. pref. 4 の次に「神の両手」としての「御言葉」と「聖霊」の働きが明瞭に記されている最初の箇所は、AH4. 20. 1 である。ここでもやはり「御言葉と知恵」を「御子と聖霊」に言い換えている。けれども、AH4. 20. 1 に至ると、ただの言い換えを行っているだけではなく、父なる神が、「御子」と「聖霊」に向かって「私たちのかたち（似像）に、また類似性に人を造ろう」と語ったことが記されている。即ち、神が何か他の力や、神ご自身から独立した何かかによって、人を造られたのではなく、あたかも「2つの手を持っている人の姿」のように、神と共にいる「御子」そして「聖霊」とによって、人の創造が行われたことへと発展している³⁸。AH 4. 20. 1 には次のように記されている。

神は地の泥を取り、人を形造り、そして、彼の顔に生命の息を吹き込んだ。
それ故、私たちを造ったのも、私たちを形造ったのも天使たちではなく、天使たちも、真の神のほかの他の者も、万物の父から遠く離れた力も、神の似像を造ることはできないからである。また神は自らのもとで予め決定したものを造るのに、あたかもご自身の両手を持っていないかのように、これら（天使たち）を必要としたのでもない。神の側には常に御言葉と知恵、御子と聖霊（がおり）、（御言葉と知恵）によって、また、（御言葉と知恵）のうちに、また自発性³⁹を持って万物を造り、（御言葉と知恵）に向かって語り、「私たちのかたち（似像）に、また類似性に人を造ろう」と言ったのであり、ご自身で創造されたものの存在と、つくられたものと、世にある美しいものの型⁴⁰をご自身から取ったのである⁴¹。

このようにエイレナイオスは『異端反駁』第4卷において「神の両手」としての「御言葉」と「知恵」を登場させ、これを「御子」と「聖霊」に置き換えている。

それではエイレナイオスが「神の両手」としての「御言葉」と「知恵」を「御子」と「聖霊」に置き換えて示そうとした「知恵」としての聖霊の働きとは、一体どのようなものであろうか。それはまず第1に、「神の両手」である「知恵」としての聖霊が、唯一の神のみによる創造も活動を証明しているということである。加えて、このことは、創造主である神の一員としての聖霊の「永遠性」をも証明しているものである⁴²。

エイレナイオスは「唯一の神による創造」ということを強調する。先ほどの AH4. 20. 1 の記述のうちにも「私たちを形造ったのも天使たちではなく、天使たちも、真の神のほかの他の者も、万物の父から遠く離れた力も、神の似像を造ることはできないからである。また神は自らのもとで予め決定したものを造るのに、あたかもご自身の手を持っていないかのように、これら（天使たち）を必要としたのでもない。」と記している。

ここで、エイレナイオスは、(1) 天使たち、(2) 真の神のほかの他の者、(3) 万物の父から遠く離れた力などによって人間が造られたとの思想を退けている。その代わりに、父なる神と常に共にいる「御言葉と知恵」即ち、「御子と聖霊」がすべてのものを造られたことを主張している。父なる神と常に共にいる「御子」と「聖霊」が人間を造ったことをエイレナイオスは主張し、その創造の仕方として創世記 1:26 を引用している。それが「私たちの似像に、また類似性に人を造ろう」と言ったということである。

エイレナイオスにおいて、父なる神のみが、ご自身の両手である「御子」と「聖霊」に語りかけ、人を創造したということは非常に重要な意味を持つ。なぜなら、エイレナイオスの論敵であったグノーシス主義もまた、創世記 1:26 を解釈しつつ、人の創造

について言及しているからである。AH1.5.5. では、

さて、(デーミウールゴスは) この世を造ったとき、この乾いた大地からではなく、不可視の存在から、(すなわち) 物質の(中の) 流れ出る液状(の部分) からとて⁴³ 泥の人間を造り、これに心魂的な人を吹き込んだと言明する。そして、これが『(模) 像と類似性に基づいて』生じた人である⁴⁴。(模) 像に基づいて(生じたの) が物質的な人であり⁴⁵、(これは) 似てはいても神と同質のものではない。他方、類似性に基づいて(生じたの) が心魂的な人であり、このゆえに『生命の靈』とも言われている⁴⁶。その存在が靈的溢出に由来するからである。その後、(デーミウールゴスは) 彼に『皮の衣』をまとわせたという。そして、これが感覚可能な肉体であると主張するのである⁴⁷。

この引用からも分かるように、エイレナイオスが「私たちのかたち(似像)に、また類似性に人を造ろう」と AH4.20.1において述べていること自体が、グノーシス主義に対する反駁の意味を持っているのである。なぜなら、AH1.5.5. で示されていたグノーシス主義の主張する「かたち」と「類似性」による人の創造の場合、そこには(1) 「(模) 像に基づいて(生じたの) が物質的な人であり、(これは) 似てはいても神と同質のものではない。」とされる人が創造され、(2) 「他方、類似性に基づいて(生じたの) が心魂的な人であり、このゆえに『生命の靈』とも言われている人の創造も語られているからである。

これに対して、エイレナイオスは「かたち」と「類似性」に従って造られた完全な人は、2種類の人が存在するのではなく、「肉」と「魂」と「靈」が備えられた完全な人として造られると考えているのである。さらにエイレナイオスにおいては、この「かたち」と「類似性」は、「神の両手」である「御子」と「聖靈」にも結びつけて考えられている。AH5.28.4 には、次のように記されている。

人は初めに、神の両手によって、即ち、御子と聖靈によって造られ、神のかたちと類似性⁴⁸に従って造られた⁴⁹。

まず、「神の両手」が「御子」と「聖靈」であるとの言い換えがあり、加えて、「御子と神のかたち」、そして「聖靈と類似性」がそれぞれ関係づけられていることが示されている。これは、文字通り「御子」が「かたち」を与え、そして「聖靈」が「類似性」を与えたことを明らかにされている。このようにして造られた人は「完全な人」(perfectus homo)と呼ばれ、人を形造る要素としての「肉」「魂」そして「靈」に加えて、「神のかたち」と「神の類似性」を有するものであることが AH5.6.1 において次のように語られている。

もし、誰かが形成物である肉の実体を取り除き、そして、自分が全く靈のみを理解するとしても、もはや、そのような靈的な人ではなく、人の靈、もしくは神の靈(である)。しかし、魂と混合した聖靈が形成物に一体となるとき、聖靈の流出の故に、人は靈的、そして、完全になるのである。そして、それが神のかたちと類似性に従って造られたものである⁵⁰。

つまり「聖靈の流出」が「肉」と一体となるときに、「完全な人」となり、それが「神のかたち」と「神の類似性」に従って造られた人の姿であることが語られている。

3. 3. 隆落

続いて私たちが考えなければならないことは次のことである。まず第1に、「なぜ人は堕落したのか、そして人が初めに造られた状態は、どのようなものであったか」ということ、第2に「堕落した人がどのような状態になったのか」ということ、そして第3に、「堕落して『完全な人』ではなくなつた者が、如何にして再び『完全な人』となるのか」ということである。

それでは、まず、「なぜ人は堕落したのか、そして人が初めに造られた状態は、どのようなものであったか」という点を見るために AH4. 39. 1 と AH4. 38. 1 を確認していきたい。

AH4. 39. 1 には、次のように記されている

人は善いことと悪いことの知識を受け取った。神に従うことは善いことであり、そして、神に信頼し、また、神の命令を守ること、これが人の生命である。神に従わないことが悪であるように、これが死である⁵¹。

また、AH4. 38. 1 には、

ちょうど母親が幼児に完全な食物を与えることができても、(幼児は) まだ堅い食物を受け取ることができず、同様に、神ご自身も初めから人に完全さを与えることはできたが、人がそれを受け取ることができなかつたのである。つまり幼児であった(からである)⁵²。

このように上記の2つの箇所を見ると、初めに造られたときの人の状態というのは、[幼児のようなもの] であり、「何が善で、何が悪であるのか」の判断が完全には行うことができなかつたのである。AH4. 38. 1 のうちに「神ご自身も初めから人に完全さを与えることはできた」ということが記されているが、これに関連して、「なぜ、神は人を初めから幼児ではなく、『大人』の識別力を持つ者として造らなかつたのか」という疑問が当然のこと生じる。これに対するエイレナイオスの主張を AH4. 37. 1、AH4. 37. 4 などに見出すことができる。AH4. 37. 1、

なぜなら、神は初めから人を、自分の力を持ち、まるで自分の魂を(持つものの) ように自由に造られた。(それは) 強制されたのではなく、神の意志を自発的に行う(ためである)⁵³。

AH4. 37. 4、

しかし、人は初めから自由な意志があった。というのも(その) 人を似せて造った神に自由な意志がある(からであり)、善を保つことを常に人に助言を与える(のである)。(この善は) 神への従順によって完成される(からである)⁵⁴。

ここで示されているように、本来、幼児の状態として造られた人は、神によって与えられた「自発性」によって、神に従って行くことが求められていた。AH4. 37. 4 には「人は初めから自由な意志があった。というのも8その」人を似せて造った神に自由な意志がある」と記されており、この「自由な意志」が与えられていることも、「似せて造られた」(Similitudinem factus est) こと、つまり、「神の類似性」が関係している。換言すれば、「神の類似性」が与えられているので、人は、神に従順に歩むことをも選び取っていくことができる可能性が与えられていたと考えることが出来る。

人は「神の類似性」に造られ、神への「自発的」な従順が求められていた⁵⁵。それは、人が「神への従順を通して」完成へと至るためである。先に記したように、造ら

れた状態での人は、まさに「幼児」であり、そこから「完成」へと導かれる必要があったのである。この点に関して AH5. 28. 4 では次のように記されている。

そして、初めに神の両手、即ち、御子と聖靈によって造られた人は、すべてのときにおいて、神のかたちと神の類似性に造られた⁵⁶。

このように「すべてのとき」において、人は完全な「神のかたちと神の類似性」に造られていくように求められているのである。

3. 4 墮落と「神の両手」の関係性

続いて重要な点は、この「幼児」から「大人としての完成」へという過程は、墮落の後でも失われたわけではないということである。エイレナイオスは墮落を AH3. 20. 1 でつぎのように説明している。

すべての肉なる者が、主の前で誇ることがないように、人が自分のもとに（ある）不滅性が、自らの本性（としてある）と思い、神について反対の思いを持つことがない（ように）、真理を保たず、虚しい高慢さで、本性として神に似ていると誇示するがないように、自分を完全に造った者に（対し）、むしろ感謝をせず、神の人に持っていた愛に暗くなり、彼の知性が盲目になり、神について相応しく考えられず、自分を神に等しく、同等である判断する（ようになってしまったのである）⁵⁷。

また AH4. 40. 3 には

このように、この天使は、神が造った者を妬み、彼を神に敵対させようとしたことにより、背教者であり、敵である。それ故、神も自分自身で密かに種をまいた者、即ち、違反を持ち込んだ者を、自分の交わりから分離させ、惡意が（あった）が、不注意に（より）不従順を受け入れた人を憐れみ、神に敵対するようにと欲したその敵意の方向を変え、敵対させた者へと向けた。人への敵対心は自分から取り去り、方向を変え、蛇にそれを返した。それは聖書で神が蛇に言ったと語れているとおりである。「私はお前と女性との間に敵意を置く。そして、おまえと女性の子孫の間に、彼はお前の頭を踏みつぶし、そして、彼はおまえの頭を踏みつぶし、おまえは彼のかかとをうかがうであろう⁵⁸。

上の 2 つの個所から、エイレナイオスの墮落の 2 つの側面を知ることができる。即ち、1 つは「この墮落の出来事によって、人が初めの段階から、自分が神と等しいというような高慢な思いを誇示せず、幼児から完全な者へと成長していくために、人に『何が従順で、何が不従順であるのか』を教えた「教育手段」としての観点である⁵⁹。そして、もう 1 つは「神への不従順のために死がもたらされた」という観点である。

ここでは墮落したことの始まりこそ人の不従順の結果であったけれども、人が墮したことの原因が「人の不従順であった」というよりは、むしろ蛇の誘惑の問題として取り扱われていることを理解することができる。そして墮罪との関連において、「蛇が罰を受けること」を宣告するによって、人の罪を軽くしている⁶⁰。

先ほども見たように、墮罪は、人が「自発的」に造られ、自らのその自発性によって「幼児の状態から大人の状態へと向かう」その最初に起こった出来事である。そのため、幼児であった人は「悪気なく」「簡単に」蛇に欺かれたというのが、エイレナイ

オスの説明するところである。

では、この墮落と「神の両手」としての、「御子」と「聖霊」の関係はどのようなものであろうか。重要な点としては、「神の両手」が人に関わらなくなつたということではないということを挙げることができ、このことをAH5.1.3で確認することができる。

「父が『私たちは人を、私たちのかたちに、そして類似性に造ろう』と語って言われた神の両手からアダムが逃れたときはない。」

3. 4 神の「類似性」の回復

では、墮落はアダムによって、つまり人にとって、どのような意味を持っていたのであろうか。それは教育としての意味を持っていただけであるのか。もちろん、そうではない。アダムは神への不従順の結果として、「死」がもたらされた。アウグスティヌス以来、この「死」は原罪の結果として考えられている。アウグスティヌスは自身が使っていた古ラテン語版聖書のローマ5:12から「原罪」の教理を導き出した。そこには「それ故、1人の人間によって罪がこの世に入ったように、また罪によって死が世に入り、すべての人が彼の中に罪を犯したので、死がすべての人の上に及んだ」となっている。この「彼の中に」という言葉「in quo」から「すべての人は、アダムと同じ罪を持っている」と解釈した⁶¹。そして、その結果、全人類に「死」がもたらされたと考えた。一方、アウグスティヌス以前のエイレナイオスはいわゆる「原罪論」のようなことは考えてはいない⁶²。エイレナイオスが考えるのは、「類似性を失ったこと」からくる「死」である。AH5.16.2には、次のように記されている。

かつて、事実、人は神のかたちに従って造られたと言っていたが、示されてはいなかった。人が神にかたちに従って造られた御言葉は、不可視であった。そのため、類似性も容易に失ってしまった⁶³。

このように、「神の両手」の片方である「御子」が受肉⁶⁴するまえには、人は自らが「神にかたち」に造られたことを示されてはいなかった。更に、神に与えられた自発性を、「神への従順」に用いるべきであったが、「幼児の状態」であったために、容易に蛇に欺かれ、神との「類似性」を失ったのである。これが「死」である。

そのため、人の救いとは、この「神との類似性」の回復に他ならない。ここにも、やはり「神の両手」が関係している。

人の「神との類似性」のために必要である「御子の類似性を見ること」についてエイレナイオスはAH4.33.4において次のように記している。

けれども、神の類似性に従って造られた人よりもすぐれた者、そして、卓越した者、[それは]神の子以外の他の誰であろうか。人はこの類似性に造られた。そして、この故に、終わりの時に、神の子が人となり、昔の創造を自らのうちに受け入れ、類似性を見せたのである。私たちが、これよりも前の巻で見ているように⁶⁵。

このことから、人は自らが「神の類似性」に従って造られた存在であることを、神の両手の片手である「御子」のうちに見出すのである。つまり「神の両手」としての「御子」を「見ること」によって、神との「類似性」を受ける可能性を取り戻す。そして、実際に、「類似性」を人に回復させてくださるのが、「神の両手」のもう片方である「聖霊」の働きである。先に見たAH5.28.4では次のように記されていた。

そして、初めに神の両手、即ち、御子と聖霊によって造られた人は、すべて

のときにおいて、神のかたちと神の類似性に造られる⁶⁶。

ここで、「御子と神のかたち」、そして「聖霊と神の類似性」と結び合わされている。つまり、「神の類似性」を回復するということは、「聖霊」を受けることを意味している。そして聖霊を受けた人は、「完全な人」となるのである。AH5.6.1には

父の両手によって、即ち、御子と聖霊によって、人は神の類似性に従ってなるけれども、人の一部ではない。また、魂と聖霊は、人の一部になることができるが、決して人ではない。けれども、完全な人とは、父の靈を受け取る魂と、神のかたちに従って造られた肉体とが混合し、結合した（人である）⁶⁷。

（中略）もし、誰かが形成物である肉の実体を取り除き、そして、自分が全く靈のみを理解するとしても、もはや、そのような靈的な人ではなく、人の靈、もしくは神の靈（である）。しかし、魂と混合した聖霊が形成物に一体となるとき、聖霊の流出の故に、人は靈的、そして、完全になるのである。そして、それが神のかたちと類似したがって造られたものである⁶⁸。」

このように「神の両手、即ち、御子と聖霊によって造られた人は、すべてのときにおいて、神のかたちと神の類似性に造られる」とこと「魂と混合した聖霊が、形成物に一体となるとき、聖霊の流出のために、人は靈的に、そして完全になる」ということを合わせて考えたとき、聖霊が「肉と魂」である人間の存在に靈を注ぐことによって、「神との類似性」もまた与えられるということを理解することができる。つまり、「神の両手」の働きとして人の完成は、「知恵」である聖霊が、「神の類似性」を人に回復させることによって成り立つのである。これは「神の両手」によって造られた人が、その創造のときから、完成のときに至まで、常に父なる神の「両手」に支えられているという神の救済の歴史⁶⁹に他ならないのである。

4.まとめ

エイレナイオスはテオフィロスからの影響を受け「神の両手」のモチーフを得た。そして、テオフィロスが「御言葉と知恵」としたものを「御子と聖霊」と置き換えた。ここからエイレナイオスの聖霊論が発展したと考えられる。その「神の両手」の片方である聖霊は、もう片方である御子と共に、常に人と関わりながら、幼児として造られた人を大人へと導くように、人を創造した。しかし、人は神に「自發的」に従う従順を守れず堕落した結果、「神の類似性」を失った。この「類似性」の喪失こそ、人の死を意味した。このような状態となつても、「神の両手」である御子と聖霊は人から離れず、むしろ、人の受肉によって「神との類似性」を思い出させ、そして、聖霊が完成へと導き、本来、人が持っていた「神との類似性」を再び与え、「死」から「永遠の生命」へと導くのである。

（日本長老教会北四日市キリスト教会牧師）

（注）紙面の都合上、脚注と参考文献資料は省略いたしました。

現代に語りかける黙示録¹

山崎ランサム和彦

教会の書

「黙示録」というタイトルを聞いて、人はどのようなイメージを持つだろうか。いろいろな答えがあるだろうが、一般的には世の終わりについて書いてある、恐ろしげな本、というものが多いのではないだろうか。他の正典文書とは毛色の異なる、何か「特殊な本」「難解な本」というイメージが一般的にあるのは確かだと思う。さらに、このような黙示録のイメージは、未信者や一般の信徒だけでなく、ある程度は教職者についても言えるのではないかと思う。他の正典文書に比べ、聖日の礼拝で黙示録から説教されることは比較的少ないのではないか。² しかし、黙示録のテクスト自体は、それがまさに教会のための書であることを明確に主張しているのである：

「イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。ヨハネは、神のことばとイエス・キリストのあかし、すなわち、彼の見たすべての事をあかしした。この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。」(1:1-3)

ここに明確に記されているように、本書はイエス・キリストからの黙示 ($\alpha\pi\circ\kappa\acute{\alpha}\lambda\beta\psi\acute{\iota}\varsigma$ =啓示) であり、そのメッセージはキリストの「しもべたち」つまり教会に与えられたものである。そのメッセージは教会で朗読され、聞かれ、心に留められなければならないものである。³

黙示録へのアプローチ

それでは、いったい今日の教会は黙示録をどのように読んでいけばよいのだろうか。今日多くの人々は、黙示録は将来訪れる世の終わりについて語っている本だと考えている。黙示録は、確かにある意味では未来に起こる出来事について語っている。しかし、ここから多くの人々は、「黙示録に書かれている内容は、今後の世界の歴史の中で起こるべき具体的な出来事と正確に対応している」と考える。これは必ずしも黙示録の唯一の解釈ではないが、このような「未来の青写真」として黙示録を読むアプローチは、キリスト教の内外で大変人気がある。しかし、このような黙示録の解釈法は様々の問題を含んでいる。

聖書の象徴表現はたしかに何らかの指示対象を持っている。しかし黙示録の象徴を解釈するためには、それらの象徴がヨハネとその読者が共有していた1世紀の概念世界においてどのような機能を持っていたかを考えなくてはならない。⁴ そのためには、ヨハネとその読者が生きていた歴史的背景(1世紀末のローマ帝国のアジア州の政治・経済・文化等)、彼らが親しんでいた文学的背景(旧約聖書、ユダヤ黙示文学など)についての知識が不可欠である。

黙示録の主題

一般に黙示録は世の終わりについて書かれた本、という理解がある。つまり、黙示録の中心テーマは終末論だというのである。しかしこれは正確な理解ではない。確かに終末論は黙示録の重要なテーマの一つである。しかし、それはより重要な別のテーマに奉仕する役割がある。それは「神の主権」というテーマである。

黙示録において神(とキリスト)の絶対的主権が強調されている。神は万物を創造された方であり(4:11、10:6)、今もすべてを支配しておられる方である。また神は過去・現在・未来のすべてを治める歴史の主でもある(1:8)。この「神の主権」という中心テーマから、二つのサブテーマが派生する。

第一は「神の義」に関する問題である。「神義論」「悪の問題」と言っても良い。ヨ

ハネとその教会が直面していたジレンマは、「絶対的な主権者たる神がおられるというのに、現実には、この地上にその主権が充分に及んでいるように見えない」ということであった。これはヨハネ黙示録の文学的ジャンルに最も近いと考えられる、ユダヤの默示文学の中心テーマでもあった。善にして全能なる神がおられるのに、なぜこの世には悪や苦しみが満ちているのか。なかんずく、まことの神を信じている神の民がなぜ苦しまなければならないのか。これは深刻な神学的问题であったし、現在もあり続いている。黙示録はそのような問い合わせに対して一定の答えを与えていた。

その答えとは簡単に言えば「神はいつまでも地上の悪を放置しておかれる方ではない。いつか必ず正しい裁きを行い、すべての悪を滅ぼして、ご自分の義を天だけでなく地の上にも現わされる時が来る」というものである。その時とは、キリストの再臨の時である（1:7）。

もう一つのサブテーマは、「倫理」である。絶対的な主権者である神とキリスト（この両者の描写は本書ではしばしば重なっている）に私たちがどう関わって生きるか、ということは大きな問題である。その中でも特に礼拝の問題は重要である。偶像礼拝を拒絶して創造者であり主権者である神（とキリスト）のみを礼拝する、ということが本書を貫く大きな主題となっている。

このように「神の主権」そしてその中に含まれる「神の義」「倫理」といった主題は、現代の教会にとって計り知れない重要性と緊急性を持っている。この地上では未だに悪の力が猛威をふるっている。しかし、やがて神がキリストを通して地上の悪を滅ぼし、すべてを神のきよさと愛と恵みが覆い尽くす時が来る。そういう意味では、確かに終末論が関わってくるが、教会の使命はそのような終末の希望を持つつ、「いまここで」唯一の神と主キリストだけを礼拝し仕えていくことである。⁵ そういう意味では、黙示録はすぐれて現代的な書であると言える。

黙示録の時代背景

聖書は歴史の真空の中で書かれた書ではない。黙示録を含む各書巻は、具体的な歴史的現実の中に生きる人々に語りかけるメッセージとして書かれた。黙示録のメッセージを読み取るためにも、この書がどのような歴史的状況の中で書かれたのか、著者であるヨハネや彼がメッセージを発信している教会共同体はどのような歴史的現実の中に生きていたのか、を知ることは大変重要である。

黙示録の著作年代に関する学問的議論は、主に2つの仮説に集約される。一つはネロの治世、特にその迫害下で書かれた（66–68年頃）というもの。もう一つは、ドミティアヌスの治世に書かれた（92–95年頃）というものである。前者の説は19世紀に人気があったが、20世紀以降は後者が優勢になった。⁶ このような黙示録の著作年代推定は、本書が書かれた当時の社会的状況がどうであったか、と言う問題と密接に結びついている。

黙示録はローマ帝国による過酷な迫害の下にあったクリスチャンたちに向けて書かれた、と多くの人が考えている。ネロやドミティアヌスの治世に黙示録が書かれたという学説も、これらの皇帝がクリスチャンを大規模に迫害したという想定の下になされていた。

しかし、最近の研究では、このような歴史的な想定には無理があることが分かってきている。ネロによる迫害はローマ帝国による最初の組織的なキリスト教弾圧のケースとして重要であるが、それは短期間で終わり、またローマとその周辺に限定されたものであった。つまり黙示録の読者である、アジア州の教会には直接的影響はなかったと思われる。以前の学者たちは、ドミティアヌスの時代に大規模な迫害があり、それが黙示録執筆のきっかけとなったと考える人々がいた。しかし、1980年代頃から、この説にも疑問が投げかけられるようになった。最近の研究ではドミティアヌスの時代には公式的なキリスト教迫害はなかったということが明らかになってきている。

もう一つの問題は皇帝礼拝の問題である。黙示録13章に描かれているように、皇帝礼拝は黙示録における大きなテーマの一つである。伝統的にローマは存命中の支配者を神格化することを嫌い、初代皇帝のアウグストゥスは死後神格化された。しかしネロは神格化されなかった。これに対してドミティアヌスは自らを「我らの主また神」

と呼ぶように強要したとされてきた。しかし、これについても、最近では異論がある。ドミティアヌスが自らを神と呼ぶように強要したというのは、彼の死後、彼に反対する者たちが彼を貶めるために書いたものであった可能性が指摘されている。したがって、ドミティアヌスが自らを神として礼拝することを強制したという確固たる歴史的証拠はない。

つまり、近年の研究によると、ネロ治世下説をとるにせよ、ドミティアヌス治世下説をとるにせよ、黙示録が書かれた当時、大規模で公式的なキリスト教迫害があつたり、また皇帝礼拝がローマ当局によって強制されていたという確証はないということになる。すると、黙示録は迫害下にあった教会に向けて書かれたという従来の想定が崩れてしまうのである。

最近では、このような学会の潮流に対してバランスを取る動きも出てきている。ローマでは「公式には」皇帝礼拝が行われたことはほとんどなかつたが、一般の民衆レベルで皇帝を神格化して礼拝することはアウグストゥス以来盛んに行われていた。迫害についても同様のことが言える。ローマ帝国による公式的な広範囲の迫害はなかつたとしても、局所的で非公式な迫害はあつたと考えられる。実際に黙示録はペルガモのアンテパスが殺された事件に言及している(2:12)。また実際に暴力的な迫害がなかつたとしても、皇帝礼拝やその他の宗教行事に参加するように促す強力な社会的圧力が存在していたことは疑いない。町が主催する神殿での礼拝や、地域の同業者組合の主催する偶像礼拝的な食事会への参加はすべての市民に期待されていたことであつた。この傾向は特にローマ帝国への忠誠心の篤かったアジア州では強かつたと思われる。復活のキリストによる7つの教会へのメッセージは、教会外の世界からの敵意、反感、社会的緊張を反映しているのである。⁷

当時の社会状況をまとめると、ローマ帝国による公式の迫害や皇帝礼拝の強制はなかつたとはいえ、地域主導の皇帝礼拝やその他の異教的行事に参加するように求める強力な社会的圧力のもとにクリスチヤンたちは生活していた。そして、局所的・散発的な迫害は実際にあり、近い将来に組織的な弾圧が行われることを予想するに十分な状況であつたと思われる。つまり、ヨハネが本書を書いた当時の教会は、従来考えられていたような、現実的な激しい組織的弾圧の中にあつたわけではないが、いつそうなつてもおかしくないような状況に置かれていたと言える。

黙示録の読者層

次に、ヨハネが黙示録を書き送った対象であるオリジナルの読者はどのような人々であったのかを考えよう。本書は「アジアにある七つの教会へ」(1:4)とあるように、ローマ帝国のアジア州にあつた七つの教会(エペソ、スマルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤ)と、おそらくその周辺の諸教会に宛てられている。

そのような教会に集まるクリスチヤンたちはどのような人々だったのだろうか。多くの人々は、黙示録の読者は「ローマから迫害されている貧しい少数派」というイメージを持っているが、それはヨハネの読者層の一部にしか当てはまらない。リチャード・ボウカムは『ヨハネ黙示録の神学』の中で、「ヨハネ黙示録は迫害に苦しむキリスト教徒たちに対して、抑圧者たちは最後には裁かれ、彼らの正しさが立証されるのだと保証して、彼らに慰めと励ましを与るために書かれた書物である」というイメージは「通俗的一般化」であるとして退け、むしろ「彼の読者がすべて貧しくて、抑圧機構に迫害されていたわけでは決してない。多くの者は裕福で、抑圧機構と妥協していた。」と論じる。⁸ 彼らに与えられるのは励ましではなく警告と悔い改めのすすめである。

ヨハネの読者のクリスチヤンたちは都市生活者であり、多くは社会の最底辺に位置する貧しい人たちではなく、ある程度の社会的地位と財産を持ち、ローマ帝国内の経済的繁栄を享受することを可能にするような、都市生活の恩恵を受けていた人々であろう。であるからなおさら、彼らが都市生活のさまざまな偶像礼拝的な側面、不道徳な側面から離れるには大きな戦いがあったと思われる。エペソは帝国中でも有数の大都市であったし、ラオデキヤは金融業・毛織物・医薬品で有名な豊かな町であつ

た。その町の教会のクリスチャンに復活のキリストが語りかけている内容は意味深長である。「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」(3:17)。

ヨハネの読者たちが直面していたのは経済的誘惑だけではない。偶像礼拝の誘惑もあった。7つの教会へのメッセージの中で、「パラムの教え」や「ニコライ派」「イゼベル」という名で呼ばれる異端的な教えについて語られる。これらが皆同じものを指しているのかどうかについては議論があるが、いずれにしても同じような内容の教えであり、それはクリスチャンを妥協させて、偶像礼拝と不品行を行わせようというものであった。このような偶像礼拝は皇帝礼拝と結びついているものもあったが、当時の同業者組合のつきあいの上で不可避のものでもあった。つまり、クリスチャンが偶像礼拝を拒否することは、国家への忠誠心が疑われるという政治的な危険を伴つただけでなく、異教徒とのビジネスができなくなるという経済的なリスクも伴うものであった。キリストにあくまでも忠実であろうとするクリスチャンは、スマルナの教会のような貧困に陥る(2:9)可能性が充分にあった。スマルナもラオデキヤ同様に豊かな大都市であったが、そこに住むクリスチャンたちは経済的压力に負けて信仰的に妥協するよりは、赤貧に甘んじることを良しとしたのである。

つまり、ヨハネの読者たちは、ローマ帝国の経済的繁栄の中で生活し、そのイデオロギーに順応し、キリストへの信仰を妥協するプレッシャーを常に感じながら生きている人々であった。ヨハネはその中で妥協してしまっているクリスチャンに対しては厳しい警告を発して悔い改めを求め、帝国に妥協せずに迫害や貧しさの中にあるクリスチャンに対しては、慰めと励ましを与えていたのである。

ローマ帝国への批判

このように、当時のローマ帝国の中で教会が置かれていた状況、立ち位置を知ることによって、ローマに対するヨハネのメッセージも少し違った光の下で見ることができるようになる。黙示録がローマ帝国に対して批判的な内容の書であることは改めて言うまでもないが、ここでは、異教的行事への参加と経済的搾取について見ていく。

ローマ帝国は基本的に異教社会であり、クリスチャンたちはさまざまな異教的文化の中で生活を余儀なくされていた。各都市の社会生活に参加するにも、また経済活動を営むにも、さまざまな異教的行事との接触が不可避であり、時にはそれへの参加を求められることもあった。

ローマの異教的文化の一つの中心は皇帝礼拝であり、その最も詳細な描写は黙示録13章に見いだせる。そこではサタンである龍が二頭の獣を呼び出す。最初の海から上がってきた獣は反キリストとしてのローマ帝国を表しており、二頭目の地から昇ってきた獣（偽預言者）は、各都市において皇帝礼拝を推進する祭司たちを表していると考えられている。ここでは皇帝礼拝のシステムが全地をおおい、すべての人がそれに参加させられる様が描かれている。皇帝礼拝は単なる一宗教ではなく、ローマへの忠誠心のテストでもあった。ここでは宗教的強制と政治的支配が結びついている。

ただクリスチャンだけがそれに参加することを拒否することになるが、それは容易な道ではないことが示される。「地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、世の初めからその名の書きしるされていない者はみな、彼を拝むようになる。」(13:8)は、クリスチャンであれば誰でも簡単に皇帝礼拝を避けられるということを意味しない。実際、黙示録が絶えず読者に迫害に耐え抜くよう呼びかけている事実は、実際には多くのクリスチャンたちが妥協する現実があったことを示唆している。ヨハネはただ、迫害に耐えた人々のみが本当の意味でのクリスチャンだというのである。

そして、皇帝礼拝の拒絶は経済的リスクを伴うものであることが、17節に記されている。「また、その刻印、すなわち、あの獣の名、またはその名の数字を持っていては、だれも、買うことも、売ることもできないようにした。」経済の問題は、次のテーマでも扱われる。

ヨハネはローマ帝国を、力で人々を支配し、自分への礼拝を強要する「獣」として描いているだけではない。同時に彼は人々を物質的富によって誘惑する「妖女」とし

ても描いている。それが17-18章に描かれている「大淫婦バビロン」である。特に18章では、ローマ帝国の想像を絶する物質的繁栄が描かれている。世界中からの高価な商品が列挙され、その富によって地上の商人たちが利益を得ていた様が語られ、その莫大な富が神の裁きによって一瞬にして失われる様子が詩的なイメージを用いて描写される。そして、ローマのこのような経済的繁栄は、ローマの広範囲な軍事的支配と、その力を背景とした国々の搾取によって成立していた。大淫婦バビロンは獸に乗った姿で描かれている（17:3）のは、このようなローマの力と富との関係を表しているのだろう。

ここで注意しなければならないのは、このような物質的な繁栄を享受していたのは支配者であるローマ人だけではなく、その周辺にいる人々もその利益にあずかっていた、ということである。たとえばヨハネが本書を書いている宛先のアジア州は東西の通商の要所として繁栄していた。この地域から高価な大理石やぶどう酒、馬、家畜などがイタリアへと運び出されていった。またテアテラは高価な紫布の産地として有名であった（使徒16:14参照）。また、先述のようにラオデキヤの教会は物質的な豊かさによって目がくらまされ、靈的に貧しくなっていることを叱責されていた。サルデスやテアテラ、特にエペソには大きな奴隸市場があった。ヨハネはただ自分たちと無関係な対岸の火事としてローマの物質主義を批判しているのではない。彼も彼の読者も、どのような物質的繁栄の誘惑に直面することは大いにあり得たのである。⁹ また、ボウカムは、ヨハネがバビロンの富が失われたことを嘆く人々について書いているのは、読者の中にはこの嘆きに加わる可能性のある者がいたことを表しているという。¹⁰

したがって、クリスチャンはローマ=バビロンの貪欲と経済的搾取の罪と無関係ではない。クリスチャンはローマ帝国の物質的繁栄という誘惑から離れなければならぬ。そうしなければ、彼らもローマと共に裁きを受けなければならなくなる（18:4）。

皇帝礼拝にせよ、物質的繁栄の誘惑にせよ、それはただ教会と無関係な、教会の外部にある「この世の惡」ではない。これらは飴と鞭のように教会に働きかけ、時には暴力的脅しをもって、時には物質的誘惑をもって、信仰を妥協させようとしてくる。そして、黙示録の内容を見ると、すでにそのような圧力に屈して妥協してしまっているクリスチャンも大勢いたと思われる。ヨハネはただ単に「やがて神はこれらの惡を滅ぼしてくださいから大丈夫だ」と言っているのではなく、今この世にあってこれらの誘惑に妥協しないように、クリスチャンたちに語りかけているのである。

したがって、黙示録は迫害があるから抵抗せよ、という対症療法的なメッセージだけを語っているのではない。また、世の終わりに神がこの世の惡を滅ぼしてくださいのをじっと受身で待つように教えてているのでもない。もっと根源的に、この世に働いている惡の力に対して立ち向かうように、クリスチャンに呼びかけているのである。ボウカムは、黙示録の意図は単なる迫害に対する応答ではなく、ローマのイデオロギーに対して預言者的批判を加えることであるという。「ただ単にローマがキリスト教徒を迫害するから、キリスト教徒はローマに反対すべきだというのではない。むしろ、キリスト教徒はローマの帝国機構の惡と訣別しなければならないからこそ迫害を受けそうだ」というのである。」¹¹

クリスチャンはこのような惡の力に対して戦わなければならない。7つの教会へのメッセージには繰り返し「勝利を得る者」という表現が出てくる。本書の後の方を見ていくと、クリスチャンが「勝利を得る」相手は獸であることが明らかにされる。そこには迫害に耐えるということの他に、ローマの差し出す様々な魅力的な誘惑（富や快樂など）に打ち勝つということも含まれるだろう。また、惡に妥協してしまったクリスチャンたちは悔い改めて再び惡と戦い始めなければならないのである。

教会の使命と礼拝

以上、黙示録が語りかけている教会を取り巻く状況を見てきた。教会は一方では迫害や社会的プレッシャーに直面し、他方ではローマ帝国の提供する富や快樂によって誘惑されていた。そのような中で、惡の力に屈することなく、「勝利を得る」ためには何が必要なのか？

もちろん、「迫害に屈してはならない」「偶像礼拝に参加してはならない」「富の誘惑

に負けてはならない」といったことも重要であるが、さらに根源的な問題として、まず教会のアイデンティティを確立することが重要ではないかと思われる。黙示録の内容に即してこのことを考えると、教会とは「創造主なる神と救い主キリストを御靈によって礼拝する共同体」ということができるのではないかと思われる。N・T・ライトは獸と竜の支配するこの世にあって教会が神にある希望を証していくためには「眞の神、眞の三位一体の神への礼拝によってつねにリフレッシュされていかなければならない」と述べている。¹² 「礼拝」は黙示録の基本的な状況設定である。本書は教会の公の礼拝で朗読されることを目的とした書である(1:3)。また、ヨハネが復活の主からの啓示を受けたのも「主の日」であり、おそらく礼拝の文脈の中でのことではなかったかと思われる(1:10)。何よりも、ヨハネのナラティヴの中で中心的な位置を占めているのが、神と小羊キリストのおられる「天の御座」であり、そこでささげられている礼拝であった。

ヨハネは2-3章で復活の主からアジヤの7つの教会へのメッセージを託された後、これから後に起こるべき事柄についての幻を見せられるが、まず彼は天に引き上げられ、そこで神のおられる御座を目にする。そこでは永遠に生きておられる創造者なる神が、四つの生き物や24人の長老たちによって絶えず礼拝されているところである。5章に移ると小羊キリストが登場し、その十字架による贖いの御業が賛美され、神の御手から巻物を渡される。この巻物は、これから地上に実現しようとしている神の歴史的計画が記されている。つまり、4章では永遠の創造者なる神の栄光が、5章では歴史の中でキリストを通して実現された神の救いの御業が描写され、そのことの故に神とキリストに賛美と礼拝が獻げられているのである。

このような「天の礼拝」は、黙示録のナラティヴを読み解く中心的な視座を提供する。このような「天からの視点」が与えられることによって、この地上の悪の支配が相対化され、それはやがては滅び行くものであり、神とキリストの主権がやがて地上に確立されることを信じることができるようになる。

そして重要なのは、ヨハネがこのような天における礼拝の情景を読者のために描写している点である。つまり、本書を通して読者である教会もこの天の御座における礼拝に参加するように呼びかけられているのである。5章の終わりでは、神と小羊を礼拝する礼拝者の輪は四つの生き物と24人の長老たちから大きく広がり、無数の天使たち、さらにすべての被造物までが加わるものとなっている。クリスチヤンたちが地上で集まって主を礼拝する時、それはただ単に一つの地域教会での礼拝ではなく、全被造物が神とキリストを礼拝しているその中に加わるということを意味している。これは特にこの世の悪に対する戦いで疲れ果てた教会にとって大きな慰めと励ましであろう。

このように教会が「天の御座における礼拝」に参加する時、これまで見てきた地上に働く悪の力を別の視点から見ることができるようにになる。まず、皇帝礼拝に対しては、キリストこそがすべてを支配する宇宙の主権者であることを確認することができる。天の御座における礼拝は19章でも見いだされるが、そこでは再臨のキリストが地上の悪を滅ぼされたことについて「ハレルヤ」をもって賛美がなされている。天における唯一の眞の神への礼拝は、地上における皇帝や異教の神々への礼拝に対置され、神の民に対して、本当の主権者、礼拝されるべきお方はどなたであるかを語っているのである。

また、大淫婦バビロンによって表現されていた経済的繁栄の誘惑についても、それが終末に天から降りて来る新しいエルサレムの描写と対比されることによって相対化される。そこでは「大淫婦」バビロンは「小羊の花嫁」エルサレムと対比されているが、21-22章で描写されている新エルサレムの美しさ、豊かさは、ただ単に「天国だから美しい」ということではなく、地上の帝国が提供する物質的富とは比べものにならない天の都の祝福について、教会の目を向けさせる働きを持っているのである。

おわりに

以上、黙示録における教会について見てきた。黙示録が語りかけている1世紀末の教会は、ローマ帝国の支配下にあって、一方では迫害や社会的・経済的圧力の下で、唯一の神への信仰に妥協を迫られており、他方では帝国の物質的な繁栄を享受する誘

惑にさらされていた。

この歴史的状況は、現代日本の教会のそれと驚くほど類似していると思われる。現代日本の教会も、実際に迫害を受けている訳ではない。教会に集うクリスチヤンたちの多くは、経済的に困窮している訳でもない。しかしますます右傾化する政治と偶像礼拝への社会的プレッシャー、経済的・物質的豊かさの誘惑など、ヨハネの時代の教会と同様の課題を抱えているのが今日の日本の教会である。そのような意味で、黙示録が現代日本の教会に語りかけるメッセージの意義は大きいと思われる。今こそ、教会は黙示録を真摯に読み、そのメッセージを正しく受け止め、そしてそれを宣べ伝えて行かなければならない信じる。

(リバイバル聖書神学校校長)

¹ 本稿は、2014年1月、3月、5月に名古屋西地区牧師会でお話しさせていただいた講演原稿に手を入れてまとめたものであるが、紙幅の関係上、本稿執筆時点では終了していた最初の2回の講演部分しか含めることができなかった。

² 最近出た黙示録の研究書の中で、HaysとAlkierは、プロテスタン主流派の諸教会で広く用いられている Revised Common Lectionary（改訂共通聖書日課）で取り上げられる黙示録からの聖句がきわめて少ないことを指摘している。つまり、3年サイクルで編集された、礼拝で朗読されるべき聖書箇所のリストの中に、黙示録からはたった6箇所、しかも奇妙で暴力的な要素を極力含まない箇所しか記載されていないのである。Richard B. Hays and Stefan Alkier, eds., *Revelation and the Politics of Apocalyptic Interpretation* (Waco: Baylor University Press, 2012), 2.

³ 「黙示録は、この書を読んでいない者の運命について論じる書ではなく、この書を読む者に神の『恵み』にとどまり続けようと警告し励ます手紙である。」岡山英雄著『ヨハネの黙示録注解－恵みがすべてに』（東京：いのちのことば社、2014年）、14頁。

⁴ Grant R. Osborne, “Recent Trends in the Study of the Apocalypse,” in *The Face of New Testament Studies: A Survey of Recent Research* (ed. Scot McKnight and Grant R. Osborne; Grand Rapids: Baker, 2004), 490.

⁵ キリスト教に限らず、終末論は人間の行動の原動力として不可欠である。岡山英雄著『小羊の王国－黙示録は終末について何を語っているのか』（東京：いのちのことば社、2002年）、17頁参照。

⁶ Osborne, “Recent Trends,” 479. 以下に記す黙示録の著作年代に関する研究史の要約は同論文による。

⁷ David A. DeSilva, *Seeing Things John’s Way: The Rhetoric of the Book of Revelation* (Louisville: Westminster John Knox, 2009), 53.

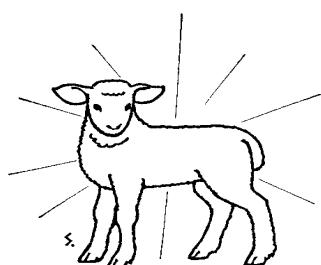
⁸ R・ボウカム著、飯郷友康・小河陽訳『ヨハネ黙示録の神学』（東京：新教出版社、2001年）、21頁。

⁹ Craig R. Koester, “Revelation’s Visionary Challenge to Ordinary Empire,” *Interpretation* 63, no. 1 (2009), 11-12.

¹⁰ Richard Bauckham, *The Climax of Prophecy: Studies on the Book of Revelation* (Edinburgh: T & T Clark, 1993), 376.

¹¹ 『ヨハネ黙示録の神学』、51頁。

¹² N. T. Wright, “Revelation and Christian Hope: Political Implications of the Revelation to John” in Hays & Alkier, eds., *Revelation and the Politics of Apocalyptic Interpretation*, 121.



アウグスティヌスとは誰なのか

松浦 剛

2012年のことであった。私が居住している名古屋市中村区内の古書店で「アウグスティヌス著作集」(教文館)の第1期刊行分16冊が売られていた。値段交渉をすると、1冊1000円で提供されることとなったので、その場で購入した。

その後、CLC名古屋店にて第2期刊行分として13冊を求め、さらに別巻2冊書簡編も買った。何分1冊が6000~7000円の定価なので、第2期刊行分のうち2冊は注文していないし、未完のものも3冊ある。いずれにしても、ここ1~2年の間に、あと5冊買うことになるし、CLC名古屋店をもうけさせることになる。

アウグスティヌスの生涯

このような次第で、足掛け3年間アウグスティヌスの著作に触れることが何度もあった。この人の全体像がつかみたかった。そこで手にしたのが「広辞苑」第4版(岩波書店、1991年)である。アウグスティヌスの項目を引いてみた。[Aurelius Augustinus]初期キリスト教会最大の思想家。初めマニ教を奉じ、やがて新プラトン哲学(特にプロティノス)に転じたが、遂にミラノで洗礼を受け、生地北アフリカに帰りヒッポの司教に就任、同地で没。その神学の核心は、人間は神の絶対的恩恵によってのみ救われる。教会はその救いの唯一の伝達機関である。地上の国家は神の国たる教会の精神的教導を受けるべきである、の3点。哲学は自己の自証性と公理照明説が特色。著「告白」「三位一体論」「神の国」など。聖オーガスチン(354~430)。

このような記述を読み、簡略ではあるがアウグスティヌスの生涯と思想を掌握することができる。ただ、「広辞苑」に盛られた情報だけでは不十分であるため、多少は補っておきたい。

アウグスティヌスは西方教会における最大の教父と呼ばれている。345年に北アフリカのカルタゴからそう遠くはない、ヌミディア州タガステにおいて誕生した。父親パトリキウスはローマ人の血統をひく非キリスト教徒であり、母モニカはクリスチャンであり、タガステの土地の出身者であった。アウグスティヌスは青年時に父親と死別し、友の支援によってカルタゴで学んだ。社会人となってから修辞学の教師として生きた。キリスト教徒になったとき、32歳であった。キリストによる救いを受けて以後、出身地に戻り、友人数人と共同生活をし、修道院と同じ目的で互いの信仰を養った。

391年、37歳でヒッポの教会の説教者として立てられ、396年、彼が42歳の時に司教に任命された。以後死に至るまでの40年間を教会の指導者としてヒッポにおいて奉仕を貫いた。ドナティスト批判、ペラギウス派やマニ教への論駁など、異端に向けての文章を執筆してキリスト教側の教えの確立にいそしんだ。「広辞苑」に紹介されていた3大著述も書き上げて、76歳でヒッポにて召天した。

アウグスティヌスとは誰なのか

筆者は、若い日に4年間にわたって神学教育を受け、27歳で教職者としての奉仕をスタートさせた。アカデミックな神学校で学んだわけではなかったので、牧師になるための実際的な訓練と学びをしたに過ぎない。すなわち、今日まで一平卒として町の牧師として生きてきた。素養も学識もないまま丸腰で戦ってきた感がある。そうであるため、「アウグスティヌス著作集」を読んでも、読みこなすところまではいかない。ただ、広く浅く、つまみ食いのようにしてアウグスティヌスの著作に触れて、我流に学ぶだけである。

そのような者ではあるが、今の時点で「アウグスティヌスとは誰なのか」という問

いを発する気持になった。あまりにも大きく、偉大な人物であり、私ごとき者が彼を誰と判断することなど出来っこない。ただ、宗教改革者ルターの著作を下敷きにして、こうではないのかと思うことがある。

聖文舎から「ルター著作集」第1集が出ている。全部で10巻くらいではなかったか。このシリーズの中に、「キリスト者貴族に与えられる」、「教会のバビロン捕囚」、「キリスト者の自由」などの宗教改革に関わる著作が収録されている。「ルター著作集」を若い日に購読して、宗教改革の息吹に触れたという貴重な経験をした。ところが、60歳代半ばから「ルター著作集」第II集を購読するチャンスに恵まれた。「ガラテヤ大講解」、「第2回詩篇講義」、「第1コリント15章講解説教」などルターの聖書に基づく講解や講義を読んで驚くと共に、その内容の豊かさに嬉しい悲鳴を上げた次第である。

ルターとは誰であったのかに気づいた。すなわち、ルターは説教者であり、牧会者であった。みことばを説き明かすることに命をかけた神の器であったのである。

アウグスティヌスの著述は、ボリュームがあり過ぎて、当初はその内容を掴みにくかったのであるが、ルターの著作と相通じる側面があることに気づいた。すなわち、「神の国」「三位一体論」「ペラギウス派駁論集」というような神学的主題を扱った著作群の他に、説教集とか説教論といえるものが読み切れないほどある。主なものとして、詩篇全篇講解とヨハネによる福音書全章講解である。ヒッポの教会に日曜日ごとに集まる一般会衆に向けて、その魂の養いを願いながら心を碎いてみことばが取り継がれている。創世記全句注解、パウロの手紙講解（ことにローマ人への手紙）なども味わい深い内容である。古代と中世の橋渡しをした神学者がアウグスティヌスであると聞いていたが、古い時代に聖書のことばが忠実に講解されていて、著作集の読者の一人である私を養ってくれる。

アウグスティヌスとは誰であったのかという問い合わせに対し、今日の時代の牧師たちと同じように、みことばそのものの説教者であったと言える。この辺にアウグスティヌスへの親近感と尊敬を覚える。講解の1行1行に説教者としての喜びや苦悩を読み取ることができる。あるいは、説教に命をかけて奉仕しているアウグスティヌスの姿を想像できる。

アウグスティヌスの説教

このくらいで文章を閉じてもよいのだが、それではあまりにも脳がない。筆者自身の気持ちとしても、落ち付かない。そこで、アウグスティヌスの説教の方法とか、傾向のようなことを専門家の助けも借りて紹介しておきたい。関西学院大学神学部教授宮谷宣史は、アウグスティヌスが説教をどのように準備したかを伝えている。

「説教段階において、まず、選んだ聖書のテキストを、語句、表現などに注意しながら精読する。内容について默想し、祈りのうちに繰り返し、繰り返し読む。次に、並行ないしは関連箇所を探し、同様に再三読む。そして聖書が何を言おうとしているかを学び、何を話すかについて思いを巡らす。説教のポイントが明確になると、それをどの言葉でどのように表現するかを考える。それから、一つ一つを心にしっかりと刻み込む。アウグスティヌスは説教を良く準備はしたが、それを書いて用意することはほとんどなかった。司教座につくと暗記に基づき、より正確に言えば、心と頭に準備されている話の内容を表現に従いつつ、自由に、だが特に聴衆の反応を見きわめながら、説教を展開していった。」（「アウグスティヌスの説教と説教論」、「説教者のための聖書講解一冊義から説教へ」、1976年、No.14、6ページ、日本基督教団出版局）

記述されていることが本当であるならばの話であるが、基本的にはアウグスティヌスと今日の牧師とは同じ手段を踏んで説教準備していることになる。ただ、私たちが用いている注解書とか辞典類がアウグスティヌスの時代にはなかったという点の違いがある。そうであれば、更に時間をかけてみことばを瞑想したり、関連引用聖句を調べたり、みことばが示しているところの意味と教えを発見していったと考えられる。

弟子によって筆記されたアウグスティヌスの説教は、本となり読み継がれていった。やがて宗教改革の時代になると、ルターや他の宗教改革者たちは彼の説教集を読み、みことばの語りかけを聞くこととなった。確かに、アウグスティヌスの詩篇講解とルターの第2回詩篇講義とは関連があるふしがある。最もルターの場合はヴィッテンベルクで大学生相手に講義したものであるから、目的やみことばの掘り下げの程度に違いがある。

岩本助成が「説教者アウグスティヌスとその説教論」を書いている（「神学と人文」第26集、1~10ページ、1986年、大阪基督教短期大学・神学院）。その結論部分で次のように記している。

「説教者アウグスティヌスとその説教論を学んで、われわれは彼が聖書解釈者として、又、説教、礼拝、牧会に生きた者としてその生涯を貫いたという二つの事柄を知った。若い日から聖書という一冊の書物が何であり、どう解釈されるべきかに悩みぬいた彼は、師アンブロシウスから新しい聖書解釈の視点と方法を教えられた。彼に影響を与えたものが他にもあったことは事実だが、にもかかわらず、それらは中心的な場を占めなかつたと言えよう。彼は聖書のことばを解釈することによって『事柄そのもの』に肉薄し、神と人間と世界に関する神学的思索を続け、普遍的、究極的に人々を救う真の解答を求めた。

他方、彼は瞬時も教会に生きることを止めなかつた。むしろ、彼が御言の役者として、礼拝の奉仕者として、教会の牧者として眞實に生きようとしたことが、彼をして聖書へと常に向かわせたと言うべきであろう。」

岩本が記していることは、キリスト教会に仕える牧師にとって重要なことを指摘している。すなわち、聖書をどのように読み、解釈し、その時代に生きる人々の現実に説教という形で光と命をどうもたらせたかである。

結論

大きな教会の牧師は超他忙である。筆者のように吹けば飛ぶような小さな教会を牧する牧師も、開拓し、維持し、盛り上げるために忙しい奉仕に明け暮れている。しかも、あと6年で75歳定年となって牧師を辞める。すべきことはした訳であるから、最後のあがきのようにアウグスティヌスやルターの学びをするのもいかがなものかとの考えがない訳ではない。本代の原資にも限りがあるし、本を読む能力も知れている。

が、しかし、少しでもよいかから「アウグスティヌス著作集」をひも解いて、彼の説教に聞くことは老骨の筆者を強め、養っていてくれる。残された説教を読みながら、これらの説教を伝えたアウグスティヌスはどのような時代に生き、奉仕し、召天したのかを考えさせられた。彼が説教者になり、司教となった頃、古代ローマ帝国は皇帝テオドシウス死（395年）後に東・西に分裂する。西ローマ帝国の首都はローマであるが、410年にローマは陥落する。476年にゲルマン人オドアケルによって西ローマ帝国は滅ぼされた。アウグスティヌスは、ローマ帝国が東・西に分裂したときには西ローマ帝国内の教会の指導者であった。

彼が56歳の時、首都ローマは他民族の手で滅ぼされた。彼が居住したヒッポの町は敵国の軍隊に攻められ、教会の司祭や信徒たちも他の地に移って身の安全を図らねばならなかつた。アウグスティヌスも町を去ることを勧められたが、「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と言って、ヒッポに留まって最後のひと息まで奉仕した。彼の死後、まもなくヒッポの町も教会も元の姿をとどめない状態となって消えて行く。

しかし、彼の説教のことばは書物として残り、ルターの時代も今日も読まれている。そして老骨の私さえも励ましているではないか。著作集を買って私のサイフは空になつた。CLC名古屋店は店を改装し、お客も多数来るようになり、経営も順調になっていくそうである。それも嬉しいことの一つである。

（日本イエス・キリスト教団名古屋教会牧師）

ルター派の礼拝について

関 昌宏

私とルター派教会

私はウエスレян・ホーリネス系の教会に属する者で、ルター派の神学や実践については十分な知識を持ち合わせていません。唯一関係があるとすれば、長男が日本福音ルーテル教会の幼稚園でお世話になったことから、今日でもその教会と交わりを持っていることです。ただ日頃から礼拝の実践について関心があるので、このたび中部部会理事会後の学びでこのテーマを発題させていただくこととしました。この学びをするにあたって、まず福音主義神学会に所属するルター派会員の論文にふれ、次に日本におけるルター派教会として最大規模を持つ日本福音ルーテル教会の礼拝解説と、その礼拝に実際に足を運んだ方の著作を参考にしました。

いくつかの参考文献から

- ① 「福音主義神学」第24号 特集テーマ 礼拝論 1993.12発行
「ルターの礼拝論の現代的意義」（橋本昭夫氏）

*ルターが新しい礼拝について直接書いているのは、「会衆の礼拝について、及びミサと聖餐の原則」（1523年）と「ドイツ語のミサ」（1525年）など少数である。（p. 28）

*ルターの礼拝改革の核は礼拝における説教の意味と位置の改革という意味での「説教改革」である。それは、改革の神学的実質において、いかなる急進的改革者よりも根源的であった。．．．恵みによって罪人を義とする神と、その神への信仰がルターの礼拝論の中心なのである。（p. 28）

*ルターの礼拝論は、カトリック的礼拝伝統に対し、形式面においては継続性を強調しつつも、内実面においては断絶によって形成されている二重性をもつと言えよう。（p. 29）

橋本氏はローマ・カトリック教会のミサとルターの聖餐理解の対比を述べています。前者はミサを犠牲として理解し、人間が神の怒りをなだめる供えものとしましたが、ルターの批判はここに集中しています。なぜならこれは業によって義とされるという行為義認であるからです。これに対してルターはミサを契約とサクラメントと捉え、人間が神に対して捧げるものではなく、神が人間に恩恵として与えられる賜物と理解したと言います。

さらに宗教改革急進派とルターの立場の相違を述べます。カールシュタットは聖像を廃止し、ドイツ語による礼拝や、詩篇歌による讃美を推し進めていきますが、その背後にある福音理解は「キリストに似ること」であり、神の恵みを受けるに先立って人間はその恵みに見合う者になっている必要があるという観点。ルターはこうした福音理解に基づく急進的な礼拝改革には同調しませんでした。それもまた律法主義だからです。ルターがローマ・カトリック教会の礼拝伝統の多くを引き継ぐことが出来たのは、式文、聖像、聖画、音楽等に信仰の墮落があるのでなく、それは人間の心にあるのだという理解、もう一つは、そうしたものも「信仰の弱い人」にとっては福音理解の助けとなると考えたからとも。

この論文を通して、ルターが礼拝において何を改革し、何を残したか、その背景にあるものが彼の福音理解であることが明確にされました。

②「牧会ジャーナル」2006年春号 特集テーマ 説教に目覚める3

教会暦による説教（正木牧人氏）

*ルーテル教会では説教のテキストを教会暦に求める。牧師たちは説教の準備を始めるのに、普通「ルーテル手帳」の該当表を開き、その日曜日に当てられている旧約聖書、使徒書、福音書、詩篇の箇所を調べる。「顕現節第六主日」などという日曜日の名前や式服ストール等の色を確認し、一年の暦の中でのその日曜日の位置づけを考える。（p.6）

この短い記述の中に、ルーテル派の伝統にある牧師の具体的な実践をかいま見ることが出来ます。「一年の暦の中でのその日曜日の位置づけを考える」というあり方は、時の流れを思い、季節感に敏感な日本人の礼拝の実践に於いて参考になるものでないでしょうか。

③聖卓に集う 日本福音ルーテル教会礼拝式書解説（前田貞一著 教文館 2004年）

ルターの礼拝改革の要点(p. 12-13)

- 1) 「聖言の儀」と「聖餐の儀」の一元化（福音の顕在化・説教の位置付）
→「神の」ことばの説教と教えは、礼拝の最も重要な部分である（ドイツ・ミサ）
- 2) 信仰者個人の信仰の確立（二形態陪餐、神の恵みへの直接的参画化）
- 3) 会衆・共同体礼拝の確立（それに伴う聖書の母国語翻訳・会衆歌＝讃美歌の創作とそれの積極的導入・礼拝様式の濾過・単純化）

このように整理されたものを読むとき、現代のプロテスタント教会において、みことばと聖餐は本当に一元化されているだろうか。聖餐が軽んじられていることはないかと反省させられます。また二形態陪餐、聖書の母国語翻訳、会衆歌＝讃美歌の創作とそれの積極的導入といった、当然になっていることが元々何を意味するのか目が開かれた思いがします。

④礼拝探訪 神の民のわざ（越川弘英著 キリスト新聞社 2009年）

日本福音ルーテル教会の礼拝

<開会の部> 初めの歌 祝福 罪の告白の勧め 罪の告白 救いの祈願祝福
キリエ グロリア

<みことばの部> 祝福の挨拶 特別の祈り 旧約聖書、使徒書の朗読（信徒担当）
ハレルヤ唱または詠歌 福音書 み言葉の歌 説教 感謝の歌
信仰告白（ニケヤ信条）

<奉獻の部> 祝福 賛美 奉獻唱 奉獻の祈り

<聖餐の部> 聖餐の歌 序詞 サンクツウス（聖なる）設定 主の祈り
平和の挨拶 アグヌスディ（神の小羊） 聖餐への招きと聖餐
聖餐の感謝

<派遣の部> ヌンク・ディミティス（今こそ去ります） 祝福
終わりの歌 後奏

この本は著者が実際に日本福音ルーテル教会に足を運び、その礼拝に出た上で書かれている点で価値あるものです。著者は「実際に出席してみれば分かることだが、日本のプロテスタントの多くが採用している説教を中心とするシンプルな礼拝やペンテコステ派などの礼拝から比べると、ルター派教会の礼拝形式と内容はむしろ聖公会やカトリック教会のそれに近い印象がある。」(p. 78-79)と感想を述べています。

具体的なこととしてほとんどの讃美を座ったまま歌うこと、これは福音書朗読、聖餐、派遣と祝福の「礼拝の核」となる場面で起立、他の場面では着席という理解に基づいてなされているとのこと。

また20世紀後半になっていくつかのルター派教会において小児陪餐の制度が導入されていることが紹介されています。このことについての解説は示唆に富みます。

「幼児洗礼によって子どもたちをキリストの体の一員として迎え入れた教会は、ひとつの主の食卓で子どもたちを養育する。そうすることによって、今度は教会全体が神の家族として結び合わされ、共々に成長していく恵みを受けることになるのである。プロテスタントの場合、ことに日本のプロテスタントの場合、信仰というものを個人の信仰に偏って強調することがこれまで多かったように思われるのだが、ここではむしろ、こうしたひとりひとりの信仰の前提となり、それを包み込み、支え、導き、またひとりひとりがそこに帰って行き、共に形作るものである教会共同体の信仰が重要なのである。」(p. 83-84)

もうひとつ著者が日本福音ルーテル教会の一教会からクリスマス礼拝の司式を頼まれた時の感想が述べられており、興味深く読ませていただきました。会衆の前で全身をさらして一定の動作や所作を守って司式することを通して、普段礼拝の場で説教壇、聖餐卓等いろいろなモノによって会衆との間に距離（隔て）を置いてしまっていることに気づかされ、姿勢、動作、動きといった視覚的でダイナミックなやり方で礼拝を導くという面がないがしろにされていたのではないかということを思わされたと言うのです。この点から司式者と会衆が対面して礼拝をささげるあり方とともに、両者が同じ姿勢、すなわち背面式で会衆をリードしつつ会衆と共に礼拝にあずかることの意義についても改めて考えさせられたと述べています。(p. 95-99)

ルター派の礼拝を学ぶという以上に、自らの教会における礼拝のあり方を多方面から考えさせられました。

(チャーチ・オブ・ゴッド春日井栄光キリスト教会)



(編集後記)

ルターの宗教改革から 500 年を迎えるようとする今日、プロテstant 信仰を考える機会が与えられていることは感謝なことです。田上先生は、教会という現場での苦闘を通して、伝道や牧会において礼拝における説教が重要な位置を占めることを語りました。改めて、プロテstant 教会の中心課題が見えてきたように思えます。エイレナイオスの聖靈理解を披露して下さった大庭先生から、西方教会側とは違う、ギリシャ教父の創世記に関する信仰理解を学びました。そこから、今日の正教会が理解する「罪、死、人間」について私たちの中に深い洞察が生まれれば幸いです。山崎先生や松浦先生からは今日を意識した、教会や牧師の姿勢・あり方について鋭い問い合わせを与えられています。時代と向き合う教会と牧師とは何を基本とするのか。礼拝のあり方を問う関先生の思いの中に、正しい説教と聖礼典の執行との課題が浮かび上がって来ます。これも、田上先生と共通する部分があるでしょう。

今回の部会報が、皆さまのお役に立てるごとに願いつつ、編集にあたりました。
皆さまからのご意見、ご投稿など、お待ちしております。

(D. H)

日本福音主義神学会中部部会報 第14号

2014年5月12日発行

編集者 檀原久由、東 正明

発行者 山崎ランサム和彦

発行所 460-0022

名古屋市中区金山2-1-3

金山クリスチャンセンター内

日本福音主義神学会中部部会

TEL/FAX 052-321-7516

郵便振替 「福音主義神学会・中部」

00850-8-84195

福音主義神学会中部部会公開講演

「ルターの説教と牧会に学ぶ」

田上篤志

5 はじめに

わたくしは13年ほど前から『説教塾』で学びを続けています。その説教塾が、昨年11月に、東京代々木のオリンピック記念青少年センターで『説教塾シンポジウム』というものを行いました。オランダからヘルリット・イミンクという神学者をお招きし、4日間にわたって、世俗化の進んだ社会で伝道をしていくための実践神学の課題、とりわけ説教学の課題について集中した討議をいたしました。

こうした学びのなかで、今まであまり感じたことのなかった一つの体験をしました。そのシンポジウムで、これまで中心的な役割を担ってこられた加藤常昭先生は、最終日の礼拝説教を除いて講演や発題は一切なさりませんでした。そのかわりに、比較的若い、わたくしと同世代に当たる先生方が講演や発題をなさいました。

そのなかに金城学園大学の深井智朗先生、東京神学大学の小泉健先生といった大学で教鞭をとっている神学者の方がいらっしゃいました。お二人ともドイツの大学で博士号を取得され、いくつもの論文や著書を出されてもいます。深井先生は、わたくしと同じ1964年のお生まれです。

そのお二人の先生の講演は、いずれも学者らしい誠実さに溢れた、また明晰なものであったと思います。それを聞いて——これから神学の新しい営みは、こういう先生方によって担われていくのだろうな、とそのことを喜ばしく感じました。その一方で——自分は、あの先生方のようにはできないなあ、それは河馬が逆立ちをするよりも難しいことだ！ ということを今更ながらに痛感してもいたのです。

しかし、そのことは自分の置かれている立場を、しょせんはしがない地方教会の一牧師であると冷めた目で見つめていたというのではありません。神学の営みは、試験管の中で実証されるものではありません。どんなに優れた神学的論考であっても、たとえそれが聖書学のような分野であっても、学問の領域で論じられているだけでは意味を持ちません。伝道と牧会の現場である教会の実践でこそ神学の真価が問われることを思いながら、神学の営みの最前線に立つ者としての自覚と誇りのようなものを感じてもいたのです。

世の人々に向けて一所懸命にみ言葉を語りながらも、それがなかなか届かない現実に打ちひしがれ、ひとりの魂のために重荷を負い、時には自分のふがいなさを責めながらも教会の現場に踏みとどまりながら労苦している牧師に、上よりの望みを見出させ、その働きを吟味するための助けとして神学の営みがあるのではないかと思います。

もとより現場の牧師もひとりの神学者でありますから、賜物を活かしてより豊かな神学の営みを展開し、それを提供してくれる神学者をわたしたちは必要としているのではな

いでしょうか。そのような神学者のひとりとしてマルティン・ルターは、21世紀の今日においても普遍的な存在であることを思います。

5

I 、説教者ルター

説教者ルターから学んだこと

説教者としてのルターを考える時に、真っ先に思い出す有名な話があります。ヴォルムスの帝国議会で、帝国アハト刑——帝国内において一切の権利を剥奪することを意味する刑——に処せられたルターは、その後ワルトブルク城に9カ月間にわたってかくまわれることになります。その間、ヴィッテンベルクの教会改革は大学の同僚カールシュタットとメランヒトンによって進められることになります。

しかし、カールシュタットの改革は熱狂主義者と結びついて過激化して修道院襲撃や聖像破壊といった混乱を引き起こし、事態収束のためにルターは懇願されてヴィッテンベルクに一時的に戻ってきます。そこでルターが混乱を鎮静させるために行ったことは8日間にわたる連続説教でありました。この一連の説教でルターは、神のみ前に立つひとりの人間としての信仰と、兄弟としての愛と奉仕を説きながら、神の言葉によって実現するキリスト者の内的改革を願ったのでした。

このことからわたくしは、神の言葉こそ真に教会を改革するものであることを、そして、神の言葉として聴かれる説教こそが一切の様々な働きや方策に勝って牧師の取り組むべきものであることを学びました。

事例——傷を負った教会の立ち直りのために——

7年前に服部喜望教会に赴任した頃、教会はあることが理由で傷を負っていた状態でした。教会から離れてしまった教会員が何人もいました。その中には役員経験者もいました。教会の雰囲気を理由に、伝道集会を開いても、そこに自分の家族や友人を安心して誘うことができないという声もありました。教会員の約半数が親族ということもいろいろと複雑な問題を生んでいました。また前任の牧師に対して批判的な教会員と、逆に肩入れする教会員とがいることもほどなく分かってきました。

こうした状況下で、わたくしはルターに倣う思いで主日礼拝の説教を語ることに集中しました。赴任した翌月からマタイによる福音書の『山上の説教』の連続講解説教を始めました。教会が立ち直っていくために『山上の説教』はふさわしい、また必要なテキストであるように思われたからです。

このテキストが教会を立ち直らせる神の言葉として聴かれるものとなるために、『山上の説教』を徹頭徹尾、福音として語ることに心を配る默想を大切にしました。G・アイヒホルツやW・リュティ、R・ボーレン、加藤常昭といった人たちの書物や説教集が『山上

の説教』を福音として語ることの良き参考と手本となりました。そうした書物の助けを借りることに躊躇しませんでした。福音を福音として、また福音による慰めを語らなければという強い思いがありました。ルターがいたるところで強調しています、恵みの神への立ち返りとしての悔い改めを抜きに真の改革はなしえないということを思い出して
5 いたからです。

恵みへの立ち返りとしての悔い改めのためには、福音による恵みがしっかりと語られていなければなりません。それに逆行する、たとえば説教のなかで具体的な事例を挙げて糾弾することは決してしてはいけないと自分に厳しく禁じました。

み言葉の適応と称して具体的な行為や考え方を奨めることも避けました。教会の現状10 を作り変えることができるは、神の言葉によって教員ひとりひとりが内的に癒され、それによって主への献身を新しくする以外にないことを信じ続けました。

赴任当初、平均 28 名の礼拝出席者数は 7 年後の今 45 名となり、教会の交わりにも朗らかさが生まれてきているように思います。そうしたことの全てが説教によって成し遂げられたわけではありませんが、説教が果たした役割は大きかったと思います。

15

ルターの説教をどのように学んだか

日本語に翻訳されて読むことのできるルターの説教を見つけては、それを買い求め、読むことをしてきました。とはいって、2000 を超える説教が現存しているといわれるルターの説教のなかで日本語で読めるものはまことに僅かです。しかしそれでも、クリスマスとイースターの説教、ヨハネによる福音書第 1～4 章の説教、「山上の教え」による説教、七つの悔い改めの詩篇の説教、ガラテヤ書の講解、ヨナ書講解、また福音書のおもだった箇所からの説教など、聖書講解も含めればそれなりの数になります。

こうしたルターの説教のなかから適当なものを選び、その説教全体を自分の普段語っている説教の言葉づかいに置き換えて作り直してみたことがあります。翻訳された説教25 は、翻訳者の意図でそうしているのでしょうか、説教全体の語り口が「である」調になっていたりして、現実の説教の言葉づかいからすれば、かなり硬直した文章になってしまることが多いからです。

長いセンテンスを短く区切ったり、文意を損なわない範囲でわかりやすい言葉づかいにしたりと、それをルターの原文ではなく訳文から行うのですから、学問的にはルターの説教とは言い得ないものにしてしまうことは承知の上です。

しかし、それをすることで書物のなかに冷凍保存されていたような説教が、ぬくもりを得た、生きた言葉として聴き(読み)とれるようになったことを思います。そうやって作り変えたルターの説教を、岡山県の大原教会在任中、祈祷会で朗読して紹介したとき、ひとりの老信徒が喜んでしみじみと言ったものでした。

35 ——この時代に、こんな山の中でマルチン・ルターの説教を聞くことができて、ありがたいものですなあ！

こうしたことは、ルターの説教を咀嚼するトレーニングになっていたように思います。

説教作成で意識しているルターの説教の特徴

先ほど申し上げましたような方法でルターの説教に触れてはいますが、特に分析ということをしなくとも、ルターの説教の特徴といえるものが見えてくるようになります。そのなかで「対話的説教」「キリストを指し示す説教」「物語る説教」という三つのことが、わたくしの説教作成において影響を及ぼすものになっています。

1、対話的説教

説教における対話的とは、単に、聞き手に話しかけるような語り口のことだけを指すのではありません。説教の中で頻繁に「愛する兄弟姉妹のみなさん」と呼びかけたり、「○○なのではないでしょうか」とレトリック上の問い合わせを繰り返している説教が、必ずしも対話的であるとはいえない場合も多いのです。

ルターの説教が対話的であるというとき、そこには確かに聞き手に語りかける口調も多いのですが、より重要なことは聖書の言葉に触れた聞き手の疑問や驚きをルターが汲み取って、それを説教に盛り込んで語っているということです。そうすることで、形のうえでは説教者ひとりが一方的に語る説教のなかで、語り手と聞き手の対話の関係が成立するのです。説教ではありませんが、有名な『キリスト者の自由』などは読んでいると引き込まれて行きます。それは読み手の心の反応をルターがよく考えながら文章を書いているからだと思います。

説教作成の最終段階に当たる原稿作成のときに、聞き手の反応ということを考えて文章を整えるようにしています。そのためには、黙想の段階で聞き手の置かれている状況をよく察しながら聖書テキストと向き合うことが大切なこととなってきます。

とはいっても、教会員ひとりひとり全員の状況を受けとめることはできません。ですから、聞き手としてのおもなモデルを設定します。たとえば、信仰歴の長い人・短い人、労働者、主婦、学生、高齢者、病者といったモデルを設定して、それぞれの立場に寄り添いながら聖書テキストと向き合う。そういうことをルターは行っているように思います。

2、キリストを指し示す説教

ルカス・クラナッハ(1472～1553)が描いた『説教をするルター』という有名な絵があります。その絵について徳善義和氏が次のように説明をしていられます。

「説教者ルター」の画は、説教者ルターの自己理解をはっきり掴みとった、説教の聞き手の芸術表現である。説教者ルターは、聖壇に立って、十字架のキリストを指しつづけ、自らもまた聴衆とともにそのキリストに注目するが、そのことは聖書の導きによってのみ可能だというのである(筆者註 ルターのもう一方の手は聖書を

指すように描かれている)。



ルターの説教を読んでいると、実にしばしば「見なさい」「ご覧なさい」といった、キリストへの注目を促す言葉が語られているのに気づきます。

由木康の詞による讃美歌『馬槽のなかに』(讃美歌 121 番、讃美歌 21. 280 番)が「この人を見よ」と繰り返し歌うように、ルターは聞き手の心の目をキリストに向かせることを大切にしています。

説教者というのは、聞き手がキリストを信じ、キリストに従って生きる者として成長することを願いながら説教を語るものですが、教会員のなかには聖句そのものをありがたく受けとめているがらも、その聖句を語っているキリストがよく見えていないのではないかだろうかと思われる人がいます。

聖餐を祝うときによく朗読されるマタイによる福音書第 11 章 28 節以下の「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」という慰め深い聖句にしても、呼びかけ招いて下さっているキリストに注目することがなかつたら、キリストの言葉としてのみ言葉を聴いたことにならないであります。

わたくしは説教の中で、「この言葉をお語り下さっているキリストの姿を皆さん的心に刻んで下さい」と語ることがよくあります。また「このことを語られているキリストの声の響きはどんなものであったでしょう?」と問いかけることもあります。

ごく最近の説教でもマタイによる福音書第 23 章 13 節以下に記されている「あなたたち偽善者は不幸だ」と繰り返し語られているキリストの言葉は、単なる糾弾ではなくて、呻きであるという釈義をもとに、「主の呻く声が聞こえますか、その声を聞き取りましょう」ということを語りました。そうしたことでも、キリストを指し示し、キリストご自身の言葉を聴き受けとめることを願つてのことです。

キリストを指し示すルターの説教は、旧約聖書の説教についても同じことが言えると思います。たとえば創世記の第 3 章に「原福音」を読み取ったり、旧約聖書の出来事を予型論的に解釈することについて現代の聖書学者(たとえばフォン・ラート等)は否定的ですが、こうした解釈をルターは退けてはいないように思います。それは、ルター自身が現代の聖書学を知らずに古代教会の解釈の中に生きていたからという理由だけではないよう思います。旧約聖書のテキストを単に過去の出来事としてだけ説くのではなく、今を生きる者たちへの神の言葉として語ろうとするとき、受難と復活を遂げられたキリ

ストを語ることがなければ、旧約聖書のテキストが今を生きる者たちに対する生きた神の言葉として響きを立てることができないとルターは考えていたのではないかと思います。

また、新約聖書各書の著者による旧約聖書からの引用とその解釈についてもルターは
5 それらを積極的に受けとめ、旧約聖書とキリストとの関係を説くことを大切にしている
ように思います。

3、物語る説教

(1) キリストの姿や言葉そのものを丁寧に語る

10 キリストはどのようなお方であり、何を語り、何を行って下さったのか。また、今も
わたくしどもを招き導こうとしていられるキリストのことを語ろうとするとき、その語
り口はどのようなものがふさわしいのかということが説教の文体についての問い合わせとなり
ます。キリストについての実際に起こった出来事、また今まさに起こっている事実を語
ることからすれば、物語る文体というものが説教にはふさわしく有効であることを思
15 ます。

その点、わたくしが神学校で教えられてきたスリー・ポイント説教は、その有用性を承
知してはいますが、へたをすると順序よく分かりやすく書かれている電化製品の取扱説
明書のような文体になってしまることがあるのではないかと思うことがあります。そういう
20 説教は話としてはよく分かっても、あまり聞き手の心を動かしません。キリストの声
を想う心の動きが起き難いのではないかと思うのです。

そのことは言い換えると、説教者が福音書に記されているキリストの前をあまりにも
簡単に通り過ぎてしまい、キリストそのものを語ることが薄っぺらになっているとい
うことです。

ルターが特に福音書からの説教で物語るように語るというとき、それは母親が子ども
25 に物語を語るような語り口でという意味もあるのですが、より重要なことは、キリスト
の姿や言葉そのものを丁寧に語っているということです。

聖書に記されている出来事の背景や聖書原文からの深い読み取りなどを、ひとつひと
つ説明して聞かせるというのではなく、そうした聖書研究、釈義をしっかりと踏まえた
うえで、事柄を物語って聞かせるという面がルターの説教の随所に見られます。

30

(2) キリストの言葉を説明ではなく神の言葉として語る

キリストを説明するのではなく物語ることで、神の言葉をより明確に語る可能性が大
きくされることを思います。たとえば、キリストの言葉について

——○節にありますように、キリストは「○○○」とお語りになりました。その言葉
35 の原文には○○という意味があり、その真意は○○ということにして……といったふう
に、キリストの言葉を説明する語り口になっていることが私たちには多いのではないか

しょうか。しかしルターはそうした語り方よりも、もっとストレートに
——キリストはこうおっしゃっているのです、あるいは、
——キリストはこうおっしゃっているかのようです、と前置きをして、キリストの言葉の釈義を踏まえながら、キリストの言葉を丁寧に語りなおして聞かせます。

5 もっともこうしたレトリックには危険もあるでしょう。キリストの言葉を必要以上に拡大、類推してキリストの真意ではない事柄を「キリストはこうおっしゃっているのです」と語ることになれば、とんでもないことです。そうならないためにには、神の言葉として語る際に注目される聖書テキストについての釈義はもとより、そのテキストが教会の歴史においてどのように受けとめられ解釈されてきたかという聖書研究や教会の信仰

10 (教義)による吟味が大切な課題となります。

もっとも、ルターほど大胆にキリストの言葉を語りなおすまでに至らなくても、キリストの言葉を物語ることで神の言葉としての語りに近づくことはできると思います。たとえば、

15 ——キリストは「○○○○」とお語りになりながら、皆さんを招かれるのです。と語るところを

——キリストは皆さんを招いて語られるのです。「○○○○！」
というふうに語り変えるだけでも、テキストとしてのキリストの言葉が、神の言葉としての響きを立てやすくなるように思います。

スリーポイント説教が万能ではないように、物語る説教もまた万能ではありません。
20 原文の意味などは咀嚼して物語の中に組み込んでしまうより、やはり説明として語る方が聞き手に届くということもあるように思います。

こうした点を聞き手の反応を観察しながら、一方でルターの説教に見られるように物語る説教の有用性を学び、それに倣うことができれば、説教者としてより豊かな語り口を獲得することになると思います。

25

II 牧会者ルター

30 人々の魂を慮るルターの姿

何故ルターは改革運動を起こさざるを得なかつたのかという理由を知ることは、鮮烈な印象をもって牧会者ルターを知ることでもありました。

ルターによる改革運動は、神学的論争そのものが原因であったとか、当時のローマ・カトリック教会を糾すことを直接の目的にしていたというのではなくて、ルターの牧会する教区内の人々への牧会的配慮の必要から起つたといわれています。徳善義和氏は、牧会者ルターの心を痛めた具体的な状況を次のように著していられます。

選帝侯フリードリヒはヴィッテンベルクにおけるテツェル（筆者註　ドミニコ会修道士で、贖宥券販売を委託されていた名うての説教者）の贖宥券販売を認めなかつたので、テツェル一行は、選帝侯領の境界にとどまっていたが、人々のうちには、一行のところまで赴いて贖宥券を求める者も出る始末であった。テツェルは言葉巧みに、贖宥券を買うことによって完全な赦免と煉獄からの解放ばかりか、現に煉獄にいる死人も赦免を得ることができると保証していたのである。ルターは教区司祭として、事態を黙視するに忍びず、ここに、1516年7月27日（三位一体後第10主日）に、説教の中でこれに対する見解を公にせざるを得なくなつた。これが贖宥に対する、公になされたルターのはじめての意思表示であった。そこにおいて——中略——ルターは、贖宥のもたらす誤った確かさと、倫理上の弛緩に対して警告を發したのである。

（『ルター著作集第1集第1巻』より徳善義和氏の解説文　聖文舎1964年　26頁～）

こうした牧会者としてのルターの姿を知ることで、魂への配慮としての牧会を印象深く受けとめ、牧師である自分の働きの意味と重大さを自覚してきたように思います。

赦罪の恵みへの立ち返りを促す牧会

ルターが魂の配慮を実際にどのように行っていたのかを知る手掛かりとして手紙があります。手紙による牧会と言い得るほどに、ルターは牧会的な手紙を書き送ることで、様々な具体的状況下で悩み、苦しみ、恐れおののいている魂を慰め、励ましているのです。そうした手紙を読むことで、ルターが牧会で何を大切にしていたかが浮かび上がります。

そのなかで特に強い印象をもって受けとめたことは、ルターが神の恵み、とりわけ赦罪の恵みへの立ち返りを重視していることです。十字架による赦罪の恵みこそは、如何なる状況に置かれている魂を配慮する場合においても基本であり、そこからしか魂が正しく平安を恢復することはできないと考えるからです。

この赦罪の恵みをルターは、神の言葉の約束を根拠に、また聖礼典の客観的な事実（真実）を示しながら、囁んで含むような丁寧さで説き聞かせる手紙を書いています。ルターの手紙は、ありきたりの常套句ではなく、相手の魂に届く言葉を紡ぎ出すようにして書かれています。それは手紙としての説教とも言えるものです。

その説き方は、やさしく懇ろに説かれることもあるれば、厳しく対決するかのように説かれていることもあります。いずれにしても、魂の配慮を必要としている相手と一対一で向き合っているルターの真剣な姿勢を手紙から読み取ることができます。

35 事例——聖餐をめぐっての一対一の対決

礼拝で聖餐を祝いましたときに、ひとりの婦人の教会員が聖餐を受け取りませんでし

た。礼拝後、その理由を尋ねると、自分のような者は聖餐を受けるにふさわしくないという意味の返事をされました。聖餐制定句にあるように「自分を吟味して」ということからすれば、神の恵みにふさわしくない自らの生活や具体的な罪を振り返ることはあってしかるべきであろう。そして、洗礼を受けてからもなお赦しを必要としている己を知ることもある。そうであるならば、そこでこそより一層、我々のために死のみ苦しみを受けて下さったキリストの贖いを信頼すべきではないのか、ということを語り聞かせました。しかし、その婦人は頑として自分は恵みにふさわしくないと主張し続けました。

5 そのとき私は意を決しました。——ここはひとつ対決をしなければならない！ そして一対一の対話が始まりました。その対話をしている間も、私の心にはルターの手紙の言葉が響いていました。そのときのわたしの語調は、今思うとかなり強い、厳しいものであったと思います。しかし、その婦人は最終的に改めて聖餐卓の前に立ち聖餐を受けました。ずっと後になって——あの時の先生の厳しさは自分にとって慰めになっていました、と言ってくれました。

15 事例——きよめではなくて十字架のキリストを

感情的になると自分の思いを吐露し、他の教員を傷つけてしまうひとりのご高齢の教員がいました。根は素直な人なので、後になって自分の言葉が不適切であったことを謝るのですが、その度に繰り返して言うことがありました。

10 ——わたしはきよめられていないからこういう失敗をする。きよめの恵みが足りない。
20 もっときよめられなければならない、と言うのです。

その教員とも一対一の対話をし、十字架による赦しの恵み・信仰義認の恵みに立つことを徹底して語ったことがあります。み苦しみを受けて下さったキリストに心の目を集中するところに、我々の唇もまたきよめられ、相手をさばき責める言葉を捨てができる。ただ漠然と聖霊の満たしを求めるのではなく、十字架にかかるキリストの心を我が心とできるようにと共に祈りました。

「きよめ」を強調する教派においては、赦罪の恵み(義認)ときよめ(聖化)とが分離する傾向があります。その結果、十字架による赦罪の恵みは後退し、「きよめ」という言葉だけが先行するようになってしまいます。

30 また、聖典の客觀性よりも、聖霊を受けたとか聖霊に満たされたといった靈的体験をもって恵みの事実を確認しようとするようになります。

個人の信仰体験自体は否定すべきものではありませんが、体験や感覚を土台にするのではなく、かえってこうした体験や感覚に逆らうようにして、ルターは十字架の出来事と神の言葉の約束に心を向けさせる配慮をしているといえます。そうしてこそ、恵みに立ち返る悔い改めと共に、受難の僕となって下さったキリストに倣う悔い改めが起こるといえましょう。こうした悔い改め自体が聖霊の恵みによるものであることをルターは重視していますから、決してルターの牧会は聖霊の働きを軽視したものではありません。

いわゆる「義認と聖化」の捉え方は魂の配慮にも大きな影響を持つものであるだけに、ルターの義認と聖化の捉え方、また「義人にして同時に罪人」といった理解は、わたしにとって魂の配慮の筋道をつくる基本となってきたことを思います。

5 牧会者であり続けるために

ルターが1530年に記されたとされる『結婚問題について』という文書があります。数あるルターの著作のなかにあって、それほど有名なものではないと思われますが、結婚問題という今日のわたしたちにとっても牧会上のひとつの課題となる事柄だけに、『ルタ一著作集第1集全10巻』のなかから、この題名を見出したとき、早速興味深くこれを読みました。

そのなかでルターは、結婚問題そのものについて、これをさばき判断するのは帝国の法と判事がすることであり、牧師は結婚問題の当事者の良心に関わること——それは魂の配慮と理解してもよいでしょう——を自らの領域とすべきであるということを述べています。そして、牧師の領域外のことに関わると「歯車が我々の袖を巻き込む」ように、そのことに引きずり込まれて、本来の務めを妨げさせてしまうことになるので慎重にすべきであるという意味のことを述べているのです。

この文章を読みながら、同じ神学校で学んだ友人が、卒業後ある教会の牧師に就任しながらも、数年後、牧師を辞めるに至ったことを思い出していました。その友人は教会員の結婚問題——離婚しそうな夫妻の関係——ことで深く悩んでいました。たいへん真面目な、また面倒見の良い人でしたから、そのことが悩みをより深めていたのではと思います。それが直接の原因であったかどうかは本人に尋ねることはしていませんが、その後まもなくしてその友人が牧師を辞めていたということを知りました。悩んでいた友人のために何もしてあげられなかったことを悔やむとともに、あの時の友人に、このルターの文章を紹介できていたらということを思いもするのです。

25

事例——牧会者本来の働きと友人としての助言

癌などの深刻な病気を発症した教会員やその家族が、わずかな可能性に期待を寄せ、医療機関を探し回ったり、サプリメントなどを紹介されたりしている様子を見ることがあります。自分の体験が役に立つのではと思い、より良い病院を紹介してあげたほうがよいのではないかとか、今診てもらっている医師の所見とは違った別の医師の所見を教えてあげることが励ましになるのではないかと考えたりするときに、ルターの「歯車が我々の袖を巻き込む」という言葉を思い出しては、牧師として魂の配慮に専念すべきことを自分に言い聞かせてきました。

病者への魂の配慮という課題に向き合うだけでもなすべきことはたくさんあります。治療のことや医師の診察・所見などの詳しい話にも丁寧に耳を傾けながら——医学の領域における働きの重要性を受けとめながら——牧師として魂の領域においてなすべきこ

とを欠くことがないよう気を付けてきたつもりです。

その上で具体的な相談を求められたり、助言としてなら語ることが許されるだろうと判断したときは、あくまでも牧師としてではなくて友人としての助言であるということを断りながら助言をすることはありました。また、そうした助言について、わたしが直接するのではなくて妻から言ってもらうこともありました。

もし、病院や治療方法、薬などのことについて、牧師としての意見や判断、勧めとして語ることをしたとして、その勧めが良い結果につながらず、かえって悪い結果を生むことになればどうなるでしょうか。勧めた側の心はその責任の重荷を負うことになるでしょう。また、勧めを受け、その通りにした側も置かれている状況が厳しいときなどは、勧めをした相手に対して不信感や不満を抱くことになりかねないでしょう。その不信感のゆえに、牧師としての本来の働きである牧会的対話に、いささかでも影を落とすことになれば、それは魂の配慮にとって大きな痛手となってしまいます。

説教の言葉と牧会的な対話における言葉を、相手に信頼感をもって聴き取ってもらえるようにするためにも、牧師が領域外の事柄について発言することは、たとえそれが相手のためを思ってのことであっても慎重にすべきことをルターの文書から学んだのです。

さいごに——どのようにルターから学んだか——

「ルターの説教をどのように学んだか」というところでも少し触れましたが、その学びのことをもう少し詳しく申し上げて、これからルターを学んでみようと思われる方の一助になればと思います。

作家の大江健三郎さんは大学在学中に作家としての道を歩み始められた方ですが、恩師でありますフランス文学者の渡辺一夫氏は、学者としてではなく作家として活動している大江さんにある学びの方法を教えられたようです。その方法を大江さんは実際に続けてこられ、それが作家としてのご自身の活動のために大いに役立っているということを次のように記していられます。

大学を卒業するとき、これからのかみの独学の方法だ、といって渡辺さんに本の読み方を教わった。それは3年ごと、新しく読みたいと思う対象を選んで、その作家、詩人、思想家を集中して読むという方法です。そうしますとね、ずっと読んでいるものに影響されずにはいない。そうして自分が新しい言葉の感覚を発見していく。そういうことが起きるのです。

(大江健三郎『読む人間 大江健三郎 読書講義』集英社 2007年 71頁)

大江さんがひとりの文学者に集中して3年間、その人の書いたものを読むといわれるとき、数冊の本というのではなく、その文学者の全集を読むというぐらいのことが意味されているようです。

振り返ってみると、わたしがルターの著作及びルター関係の本を読み始めましたのは、神学校入学の1年ほど前から始まって、それからだいたい10年ぐらいは、読む本の8割ぐらいはルターだったように思います。周囲から——偏っているのではないか、もっと他の人の本も読んで広く学んだ方がよいのでは、といわれることも度々でした。

5 しかし、地道に10年間ルターを読み続けてきたことで、ルターの神学を体で覚え学んできたように思います。

『ルターの神学概論』(ピノマ著 石井正巳訳 聖文舎1968年)のようなルターの神学を体系的に解説してくれている本も読みました。それはルター自身の著作を読むときの助けになりました。信頼できる人が書いたルターの著作の解説に助けられながら、ルターの著作そのものをこつこつと読み続けることで、ルターの息遣いのようなものを感じることができるようにになってきました。そのくらいになってはじめて、ルターの真似を試み、読んだことが自然に説教と牧会の実践に影響を持つようになって来ていたことを思います。

15 私がルターの著作に触れる時、それは日本語に翻訳されたものに限られています。いろいろな人が翻訳しているのですから、その訳文の文体には多少のばらつきがあります。しかし、それでも10年間ルターを読み続けているうちに、そうした日本語に訳されたルターの文章からでも、ルターらしい言葉づかいが感じられるようになってきました。

20 「一つのものに偏らないで広く学ぶ」ということは確かにそうでしょうが、一つのものを学ぶには、息の長い、集中した学びが必要ではないかと思います。各教派の神学者の本を一冊ずつまんべんなく読んだとして、果たしてどれだけのことが身につくでしょうか。学んだことが単なる知識ではなくて、実践に結び付くようになるためには、影響力をうけるほどに惚れ込むことも必要だと思います。

25 もちろん、そこで自戒しなければならないことがあります。その影響を与えてくるものを絶対化・神格化しないということです。その意味で、ルターの考え方を全面的に受け入れているわけではありません。

実は今、私はルターをあまり読んではいないのです。10年ほど前からカール・バルトを読み続けて今日に至っています。難解といわれるバルトの文章ですが10年も付き合っていると、それだけで親しみを感じますし、分かったような気がしてくるのです。殊更にバルトという名前を出さなくとも「神の言葉の神学」に生きたバルトの時にユーモアを込めた文章に触れる時、伝道に生きる自由と喜びが息を吹き返すことを思います。

30 しかし10年間というスパンは少々長すぎるでしょう。読書の集中力が少し衰えてきているかなと思う最近ですが、5年サイクルぐらいで、この度のことを機に、またルターを読んでいこうかなと思っています。

(日本イエス・キリスト教団服部喜望教会牧師)

[引用の文献以外の参考文献]

『宗教改革著作集 3巻・ルターとその周辺 1』 490 頁～徳善義和氏の解説（教文館 1983 年）

『M・ルター キリスト者の自由 全訳と吟味』 徳善義和訳著 78 頁～神の言葉が魂を自由にする

（新地書房 1985 年 現在、教文館から復刊）

5 『世界説教・説教学辞典』 545 頁～ルターの項目（日本基督教団出版局 1999 年）

『牧会者ルター』 石田順朗著 20 頁～（聖文舎 1976 年 現在、日本基督教団出版局から復刊）

『ルターと聖書』 コーイマン著 314 頁～（聖文舎 1971 年）

『ルターの聖書解釈』 ペリカン著 66 頁～（聖文舎 1970 年）

10

15

20

25

30

35

——資 料——

マルティン・ルター

5 説教・マタイによる福音書第15章21~28節

1527年受難節第2主日

ルターの信仰と神学のなかでも重要なテーマの一つである「試練」の考え方が「隠された神」との関連で聞き取ることのできる説教。『ルター選集2・ルターの説教』に収録されている岸千年訳は読みやすいものであるが、我々が普段耳にする説教からすると硬直な言葉づかいになっている。そこで田上が、普段自分が語っている説教にちかい言葉づきで書き改めてみた。

この福音書の物語は、完全な、ゆるぐことのない信仰の良い例を私たちに提供してくれています。ここに出てきています女は、三つの厳しい試練に耐えて、それに勝ちぬきました。それによって、信仰の正しいあり方とは何かということを、みごとに私たちに教えてくれています。すなわち、みことばによって啓示され、経験される神の恵みと慈しみに対する心からの信頼とはどういうことかを教えてくれているのです。

この女は、イエスの評判を聞いていたと、聖マルコは(マルコによる福音書第7章)は述べています。それはどのような評判だったのでしょうか。疑いもなく良い評判です。キリストは誰でも快く助けてくださるという良い風評を女は聞いたのでした。キリストについてのこのような評判は、まさしく福音であり、めぐみの言葉であり、そこからこの女の信仰が出てきているのです。この女に信仰がなかったら、あのようにキリストを追いかけはしなかったはずです。

聖パウロが、ローマ人への手紙(第10章17節)で述べているように、信仰は聞くことによって来るということ、また、みことばは先だって行き、救いの発端となるということを私たちはしばしば聞いてきました。そのことがこの物語にあらわれているのです。

ところで、キリストについての良い評判は多くの人が聞いていたはずですが、その人々はなぜキリストを追いかげず、キリストの良い評判のことを気にもかけないのでしょうか? 答えはこうです。医者は病人には有用な好ましい存在であるが、健康な者はそのように評価しません。この女は病人のように自分の困窮を感じていたので、ソロモンの雅歌(第1章3節)に記されているように、いわば、かぐわしい香気の後を追うようにキリストのもとに走ったのです。

のことからこう申せましょう。恵みがかぐわしいものとなり、好ましいものとなるためには、モーセが律法をもって先に立ち、人々に罪を感じるように教えなければなりません。

というのは、キリストがどれほど慕わしく、愛すべき方として描き出されていても、

人が自分自身を知つて謙虚にされ、キリストに対する熱望をもつことがなければ、すべては失われてしまうからです。ルカによる福音書(第1章53節)のマリアの讃歌が「飢えている者を良いもので飽かせ、富んでいる者を空腹のままで帰らせる」と述べている通りなのです。

5 この物語は、みじめな者、貧しい者、窮乏している者、罪人、軽蔑されている者の慰めのために語られました。そして、そうした人々が、苦しいときに、誰のもとに逃れて行き、慰めと助けとを求めたらよいかを知るために記されているのです。

さて、信仰が強く、堅固なものとなるために、神を信じる者たちの信仰を主がどれほど押し進め、引き上げておられるか、この物語から見ようではありませんか。

そこで、女の身に起こった第一の試練について先ず見てみましょう。あのような良い評判を聞き、キリストを追ってきて、キリストが評判通りに恵み深く自分を扱ってくださるに違いないという信頼をもって呼び求めた女に対してキリストのとられた姿勢、これこそは女の受けた第一の試練でした。このときキリストは、この女の信仰と信頼を何の役にも立たないかのように、ご自分の評判を落とさせるかのような姿勢をとられたのです。そこで、この女はこう考えることもできたでしょう。

——これが、情け深く、親切な方なのか…… あの方について聞き、頼りにしていた慰めがこれなのか…… そんなことがあるはずはない。たしかに、あの方は私と何のかわりも持っていない人でしょう。それならそうと「私はおまえと何のかわりもない」ぐらいは言ってくれてもよさそうなものを……

こうした女を前にイエスは、丸太のように口をつぐんでいました。見なさい！ これは、神が熱情と怒りとを込めてご自身の心を表したり、またその恵みを高く、深く隠されるときのきわめて厳しい拒絶なのです。

この拒絶に遭った女は、キリストが良い評判を守らず、自分が聞いてきためぐみの言葉を当てにならないものにしようとしていると考えざるを得なかつたであります。

さてそれでは、この哀れな女は、この拒絶に対してどうしたでしょうか。女は、キリストのこのような冷ややかな態度から目をそらしました。女は、キリストの拒絶のために、いつまでも迷わせられることはなく、そのことに心をとめることもしませんでした。そして、かえって、キリストについて聞いてきた良い評判にひたすら堅くすがり続け、確信を捨てなかつたのです。

ですから、神がすべての造られたものに対して、神のことばの伝えるところと違った姿勢をとるとしても、私たちは同じように、みことばに堅くすがり、みことばを学ぶことを止めてはならないのです。

35 しかし、それにしても！ この女が自分の感じ取ったことをすべて捨て去り、ひたすら、みことばにだけすがり、逆の事実を見出すに至るまでには、どれほど辛いことがあ

ったことでしょう！ 苦しいとき、また、死にのぞむとき、みことばにすがり続ける勇気と信仰とを持ちうるために、神の助けがありますように！

第二の試練に移ります。この女の叫びと信仰とが何の助けにもならなかったとき、弟子たちが信仰をもって進み出て、女のために願い求めました。その願いは、きっと聞き受け入れられると弟子たちは思っていたに違いありません。弟子たちは——イエスさまは、この女に対してもっとやさしくするべきだ、と考えていたのです。

ところが、私たちが見て感じるところでは、キリストは、いつそう厳しくなるばかり。そして、弟子たちの信仰と願いの二つをも無にしたのです。ここでキリストは沈黙を破り、疑問の余地もなく、願いを拒んで言われたのでした。

「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」

これは、なお一段と厳しい拒絶です。私たちは窮屈に悩むとき、神を敬う靈的な人たちのもとに行って助言と、とりなしの祈りを求めるものです。そうしたとりなしを撃退するかのようにキリストは拒絶されたのです。

ここで人は、マタイによる福音書(第 18 章 19 節)の「もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても心を合わせるなら、それがかなえられる」というような、信者たちの願いを聞きとどけると約束されたことばを全部ひっさげて、キリストに迫ることになるであります。

同じようにマルコによる福音書(第 11 章 24 節)には「なんでも求めることは、すでにかなえられたと信じなさい」とあるし、また同じような句が多くあります。それなのに、その約束はどこに行ってしまったというのでしょうか。それに対してキリストは、

——そうだ、わたしはすべての祈りをほんとうに聞きとどける。しかし、その約束は、イスラエルの家だけに与えられたのだ、と言われるのです。

あなたはどう思いますか？ 信頼していた神のことばは、自分に語られたのではなく、ほかの人のためのものであったと感じてしまったならば、これは心と信仰の二つをこなごなに粉碎する電撃ではないでしょうか。

ここではすべての聖者の願いも停止せざるを得ません。ここでもし、感情に従って行動するなら、気持ちとしては、みことばを放棄するほかはないでしょう。

しかし、この哀れな女はどうしたでしょうか。力づくで、みことばが女の心からむしりとられても、女は、なお、みことばを放棄せず、みことばにすがりつき、あのような厳しい答にも顔をそむけず、キリストの恵みが、あの答えの下になお隠されていることを堅く信頼し続けたのです。そして、女はキリストが不親切であるとか、不親切であるかもしれないといった判定を自らくだそうとはしなかったのです。これこそ、まさに、みことばを堅持することあります。

女はキリストの後を追いかけて家に入り、自分を制してキリストの前にひざますき、「主よ、私を助けてください」と言いました。

そこで女は、最後の致命的な打撃を受けます。キリストは女に面と向かって、女が犬であるかのように、そして子どものパンのわけまえをもらうにはふさわしくないと言わ

5 れたのです。これに対しては、女はなんと言いうるであります。

キリストは女を好ましくないものとして、すなわち、この女を選民に加えてはならない者、見捨てられた者としたのです。これは永遠の反論できない解答です。誰もこれを乗り越えることはできません。

しかし、女はなおもあきらめず、かえって自分が犬であるというキリストの判定に賛同したのです。キリストの判定を認め、犬以上のものでなくてもよいと考えたのであります。そうして、女は主人の食卓から落ちるパン屑を食べるだけでよいとしたのでした。これは、たいしたことです！

女はキリストご自身のことばで、キリストを捕えたのです。キリストは女を犬に等しいとされました、それを女は認め、キリストご自身が判定したように、自分が犬となること以上のこと願わなかつたのです。そうなると、キリストはどこへ逃れられましょうか。こうしてキリストは捕えられたのです。

実際のところ、人は食卓の下のパン屑を犬に与えます。これは犬の権利といつてもよい。そこでキリストもいまやまったく、すべてをひろげて女に願いに譲歩したのでした。こうして女は、もはや犬ではなくイスラエルの子にさえされたのであります。

20

この物語から私たちが知るべきことは、神がその恵みを、どれほど深く隠しておられるかということ、そして、私たちの感情や考えによって神を考えてはならず、厳密に神のことばによらなければならぬということです。

というのは、女の叫び求めに対してキリストは、冷酷をよそおっているにしても、「否」25 言って、最終的な判定をしてはいないからです。あなたは見たでしょう。キリストの答えはみな「否」のように響きはするが、「否」ではなくて、未決定であり、流動的なものであるということを。

——あなたの言うことを聞きとどけない、とキリストは言っているのではなくて、じつと沈黙を守り、「しかし」とも「否」とも言っていないのです。ですからキリストは、30 この女がイスラエルの家の者ではないとは言わずに、ただ、自分はイスラエルの家だけにつかわされたのだと言ったのです。また、キリストはこの女に対して、

——あなたは犬だ、あなたに子どものパンを与えるべきではないとは言わずに、「子どものパンをとて犬に投げ与えるのはよくない」と言われ、この女が犬であるかどうかは未決定にしているのです。

35

それにもかかわらず、三つの出来事はみな「しかし」よりも「否」の方が、一段と強く響いています。しかし、そこにおまぎれもない「しかし」が存在するのです。た

だし、それは深く隠されており、純然たる「否」のように見えててしまうのです。

試練の中にあるとき、私たちの心は「否」のほかに何もないと思ってしまう。しかし、それは当たっていません。だから、私たちの心は、感じていることから一転して、女がしたように、「否」に深く隠されている「しかし」を、神のことばに対する堅い信仰を保ち、私たちに下された主の審判については、神を正しいとしなければなりません。

5 神が私たちを罪人として、天国にふさわしくないと審判されることを良心で感じるととき、そのとき私たちは地獄を思い、永遠に見捨てられたと思うであります。そのときこそ、私たちは女のしたことを思い起してこう言うのです。

——主よ、私は罪人であって、あなたの恵みを受ける資格がないということはほんとうです。しかし、なお、あなたは罪人にゆるしを約束されました。そして、あなたは、正しい者を招くためにではなく、聖パウロが、テモテへの第一の手紙(第1章15節)に言っているように「罪人を救うために」おいでになったのです。

見なさい。神は、こうしてご自身の判定によって、私たちの上にあわれみをかけてくださるに違いありません。

15

マナセ王は、その祈りが証明しているように、悔い改めて、この女と同じことをしました。つまり、王は神の審判を正しいとし、自分は大罪人としての責めを負いながら、しかも罪人に約束された罪のゆるしを捉えたのでした。

ダビデもまた同じことをして、詩編第51篇4節において「わたしはあなたにむかい、ただあなたに罪を犯し、あなたの前に悪い事を行いました。それゆえ、あなたが宣告をお与えになるときは正しく、あなたがさばかれるときは誤りがありません」と言っています。——中略——

25 私たちは、口では罪人であるとよく言うのですが、——あなたこそ罪人である、という語りかけを心の中に聞くとき、私たちは敬虔な者と思われたいし、神を敬う者として見られたい、そして審判を免除されたいと願うものです。

しかし、確かなことは、あなたは罪人であるという神のことばに関して、神が正しい判断をしておられることを受け入れるならば、神がお与えくださる罪人の権利、すなわち罪のゆるしを得ることができるということであります。そうすれば、あなたは子犬のように食卓のパン屑を食べるだけでなく、神の子となるのです。

30

以上はこの福音書の物語の靈的な意味であり、同時に聖書解釈であります。というのは、この女が娘の病気をめぐり、その信仰によって奇跡的に娘に健康が与えられたというそのようなことが私たちにも起こりうるからです。つまり、私たちも罪と靈の病気から健康になりたいと願うとき、私たちにも同じことが起こりうるのです。

35

病気はまさに、たちの悪い悪魔です。あの場合、女は犬にならなければなりませんでした。私たちは、罪人また悪党にならなければなりません。そうすれば、私たちは、す

でに癒され、救われているのです。

ところで、この女の娘に起こったように、自分の信仰ではなくて、他人の信仰によつて、恵みと助けを得ることができるということのほかにも、この福音書の物語に関しては語られるべき大切なことがあります。それはほかの場所で十分に取りあげられています。
5 また、キリストと弟子と女とが、この物語のなかで、私たちに愛の模範を示していること、そして、誰も自分のためなく、各々が他者のために行動し、祈り、また心をくばっていることも、まったく明らかなことであるし、もちろんその点にも注目すべきあります。

(『ルター選集2・ルターの説教』 岸 千年編訳 聖文舎 1977年)

10

マルティン・ルター 説教・ヨハネによる福音書第16章5～15節

15

以下に紹介する説教は、『説教默想集成2・福音書』収録の加藤常昭氏の翻訳によるもの。加藤氏の訳文だけあって、そのまま説教できるほどに説教らしい言葉づかいの文章になっている。近年の説教学でとりあげられることの多い「物語の説教」を先取りするような文体によって語られているという点で興味深い。加藤氏はこの説教全体を翻訳しているが、ここには語り始めてから全体の約三分の一に当たる部分のみを取り上げる。この部分だけでも参考にすべきルターの語り口がよく表れていることを読みとれることがあると思う。

私どもの愛する主イエス・キリストは、この言葉を、憂い悩む弟子たちに語って下さいました。これからゲッセマネの園に赴き、別れを告げようとされた時であります。主ご自身が、死ぬほどの憂いを覚えられたからであります。主は、弟子たちがひどく憂い、悲しんでいるのをご覧になり、弟子たちを慰められ励まして下さるのです。弟子たちは今、主との別れの悲しみに勝たなければなりませんでした。これから、主ご自身の屈辱的な死に直面して、それでも躊躇ないように戦わなければなりませんでした。悪魔から、この世から襲撃を受ける苦しみに勝たなければなりませんでした。主はこう言われるのであります。

——愛する子たちよ、あなたがたは、私との別れのためにひどく悩んでいる。私があなたがたから奪われ、あなたがただけが取り残されることに心を痛めている。しかし、悲しみを捨てなさい。私が去った後には、今よりも遥かによくなるのである。なぜかと言えば、私があなたがたから去ることもなく、この肉の本質も捨てず、肉の生活からも別れることをしなかったならば、あなたがたは今のままで、すべてのものが古い本質に留まるままである。ユダヤ人はモーセの律法のもとに留まり、異教徒は依然とし

て何も見えず、すべての世界が、罪と死のもとにあり続けるだけであろう。しかし、私があなたがたから離れて、死に、父のもとに赴き、そして、神が私を送られた目的を果たすならば、私はあなたがたに聖霊を送るであろう。聖霊が、あなたがたのうちで全世界において、今までとは異なる働きを始められるはずである。それ故に、あなたがたの
5 心が今張り裂けるようになっても、あなたがたが将来の宝に到達し、聖霊を受けるようになるためには、肉において私と共に生きてきたことを断念することこそ、よいことなのである。

それ故に、私どもがつらい困難に出会っているときには、この福音書からまず学ぶべきでありましょう。それは、神に従いつつ、それを受け入れ、苦しみつつ忍耐し、互いに慰め合い、これが終われば、今よりも遥かによくなるのだと考えることを学ぶことであります。なぜかと言えば、これが神のなさり方だからです。私どもを扱われるとき、いつもそのようになります。試練と悲しみの後に、私どもの心が打ち砕かれてしまっているところで、豊かに溢れるほどに慰めて下さるのです。災いや悲しみが大きければ大きいほど、その後に、慰めも喜びも大きいのです。私どもは悲しみをしっかり受けとめ、不幸も悲しみも忍耐深く担えればよいのです。しかし、反対に、私どもが忍耐できなくなり、十字架も試練も担うことができなくなり、重荷を投げ捨てたいと思えば思うほど、ますます重荷を負うことになるかもしれません。

そういうことがありますので、キリストは、ここで、弟子たちを慰め、将来に与えられる宝、聖霊について語って下さいます。それはちょうどこう言っておられるのだとお言えましょう。

——愛する兄弟たち、大胆でありなさい。私があなたがたから去り、あなたがただけを残し、あなたがたが肉において私と共に生き、親しくしてきた生活を奪われざるを得なくなつたとしても、すべてはよくなると信じなさい。私も、ここであなたがたのもとに留まり、父が私に与えた杯を飲む必要がなければ、どれほどよいことであろうかと思う。しかし、真実を言えば、あなたがたのところに留まるよりも、あなたがたを離れて、父のもとに去る方が、あなたがたにとってはよいことであるし、それが神のご意志なのである。なぜかと言えば、私が父のもとに去ることがなかつたら、慰め主があなたがたのところに来ないからである。私が父のもとに赴くならば、慰め主、聖霊をあなたがたのところに送るつもりだ。私との別れは、私がここに留まるよりも、あなたがたにとって、遥かによいことなのである。なぜかといえば、私が留まるならば、あなたがたがわたくしから得るものは、自然的な慰め、肉に関わるだけの保護、外的な交友以上のものではありえないからである。それがあなたがたにとって何の助けになってきたであろうか。しかし、私があなたがたを離れて父のもとに赴くならば、あなたがたは霊的な慰めを得るであろう。聖霊を通じて、永遠の保護と喜びとを、私から得るのである。

ご覧なさい。私どもの愛する主イエス・キリストは、計り知ることのできないほどに繊細な心の持ち主であり、友情溢れる方がありました。地上に生きる人間が、最愛、最上の友に対しても語ることができないほどの繊細な、愛すべき、親しみを込めた、甘い言葉をもって、どんなにすばらしい仕方で弟子たちを慰め、励まして下さったことあります。

5 私どもは試練において、十字架と苦難において、忍耐深く、大胆であること、またそのように考えることを学ばなければならないということです。弟子たち、使徒たちは、その心が張り裂けそうになったとしても忍耐し、主キリストと共にあることを諦め、慰め主である聖霊を待たなければなりませんでした。そうであれば、私どもも同じことをしなければなりません。自分の十字架を負わなければなりません。忍耐し、キリストを信頼し、信じなければなりません。キリストは言われます——今よりも遙かによくなる、と。このことがこの福音書が語る第一のことです。

第二のこと。それはキリストがこう言われたことです。

15 「聖霊が来られれば、聖霊は、罪と、義と、さばきに対する、この世の目を開かれるであろう。」 これは私どものキリスト者としての信仰の根幹をなす、最もすぐれた信仰箇条であります。私どもにとって最もすばらしい、最善で最高の慰めであります。キリストはこう言われるのです。

20 ——聖霊が来られるとき、聖霊は、全世界において、あなたがたを通じて、私についての証しをさせるであろう。あなたがたは私の証人となり、全世界において私について証言をし、説教をする。私はあなた方に聖霊を送る。聖霊はあなたがたのうちに働き、あなたがたは大胆で、したたかな人間となり、全世界に攻撃を加え、これを糾すのである。

(『説教默想集成 2・福音書』 加藤常昭編訳 教文館 2008年)

マルティン・ルター
ゲオルク・シュペンラインへの手紙
1516年4月8日

- 5 ルターの同僚ゲオルク・シュペラティンと名前が似ているが別人。シュペンラインは後に修道院生活から離れ、福音主義教会(プロテスタント)の牧師になる。この手紙の中でルターは「行いによる義」と「信仰を通して、神の恵みによる義」についての区別を展開しつつ、信仰の仲間に対してとるべき行動についての勧告を与えている。
- 10 メミンゲンのアウグスティヌス修道院の隠者であり、主にある私の良き友人でもある、
信仰深く、誠実な修道士ゲオルク・シュペンラインへ。
父なる神と主イエス・キリストの恵みと平安があるように。
愛する兄弟ゲオルク。
- 15 ※手紙の前半は、実務的な内容であるので省略する

ところで、私は、自分の義によって疲れ果てているあなたの魂が、キリストの義によって、またキリストの義を信頼することによって、生き生きと生まれ変わることを学びつつあるかどうか知りたいのです。なぜなら、私たちの時代はいろいろな憶測によって、
20 多くの人が誘惑にさらされているからです。特に、キリストにおいて惜しげもなく自由に与えられる神の義を知らないで、自分の力によって、義となり、善人となろうと全力をつくそうとする人たちがいます。彼らは神の前に自分自身の徳と功績をまとめて立つために、善行を行おうとするのです。しかし、自分で立つことは不可能です。私たちの中で、あなたもこの意見、むしろ誤った考えを持つ一人です。私もそうでした。私も未だにこの間違った考え方と戦っており、克服できないでいるのです。

ですから私の愛する兄弟。十字架につけられたキリストに学びなさい。キリストに祈ることを覚えなさい。自分自身に絶望してこう祈るのです。
「主イエスよ。汝は我が義なり。されど我は汝の罪なり。汝は我がものを汝の身に引き受け、汝のものを与えたもう。汝は汝のものでなかつたものを身に負い、我がものでなかつたものを我に与えたもうた」と。

30 罪人と見られたくないという願いで、あるいは罪人にならないようにという願いによって、自分を高めないように気をつけなさい。なぜなら、キリストは罪人の中にのみ留まる方だからです。このために、キリストは義人の間で生きておられた天から降り、罪人の中に宿って下さったのです。このキリストの愛に心を集中しなさい。そうすれば、キリストの甘美な慰めを見出すでしょう。私たちが自分の業と努力によって良き良心を獲得することができるならば、どうしてキリストが死ぬ必要があったでしょうか。だか

ら、あなたはキリストにおいてのみ、自己と自己の業に絶望した時にのみ、キリストのうちに平安を見出すことができるのです。その上、あなたは、キリストがあなたを受け入れてくださったように、あなたの罪をご自分のものとして下さり、キリストの義をあなたのものとして下さったことを知るでしょう。

5 もし、あなたがこのことをしっかりと信じるならば、無知な、これまで間違って歩んでいる兄弟を受け入れるべきです。忍耐強く彼らを助け、彼らの罪をあなたの罪とすべきです。もしあなたに何か良いところがあるならば、それは彼らのものにしなさい。使徒はこう言っています。

「神の栄光のためにキリストがあなた方を受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れあいなさい」（ローマ 15：7）と。あるいはまた、

10 「このことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにも見られることです。キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執されなかつた」（フィリピ 2：5～6）と。もし、あなたが彼らよりも優れた者であったとしても、それを自分だけの戦利品のように勘定せず、身を屈めて、あなたが何者であるかを忘れ、彼らを助けることができるよう、彼らの中の一人となりなさい。

15 唾棄すべきは、自分より悪い者だからとして他者を助けることをしない人です。そして、今忍耐と祈りの手本を持って助けるべき人から逃げ出し、彼を見捨てるような人です。これは主から預かったタラントンを穴に埋めて隠すことであり、借金を返さないことなのです。したがって、もしあなたがたがキリストの百合であり、薔薇であるとするならば、あなたが茨の中に生きていることを知りなさい。あなたが、忍耐のなさ、早まった判断、かくされた高慢の結果として茨にならなかつたのは、あなたが茨の中に生きていたことを知っていたからです。詩編が示すように、キリストの支配は「敵のただなか」にあるのです。それでもなお、なぜ、あなたは自分の友人のただ中にいると考えるのですか？ ですからイエス・キリストの前にひざまずき、あなたに欠けているものを祈り求めなさい。キリストはすべてを教えて下さいます。あなたの目を、主キリストが、あなたが他者に対してなすべきことを知るために、あなたとすべての人に行って下さったことにしっかりと向けて下さい。もし、キリストが善人の間にのみ生き、友人のためのみ死ぬことを願われたとしたら、キリストは誰のために祈り、死に、誰と共に生きようとしたのでしょうか。愛する兄弟。そのように行動してください。私のために祈つて下さい。主が共にあるように。主にあって、さようなら。

あなたの兄弟 アウグスティヌス修道会士 マルティン・ルター

1516年 復活後第二主日後の火曜日

(『ルターの慰めと励ましの手紙』T・G・タッパート編 内海 望訳 リトン 2006年)

マルティン・ルター
結婚問題について
1530年

5 以下に紹介するのは『ルター著作集第一集・第9巻』に収録されている「結婚問題について」(石井正巳訳 全体で79頁)の冒頭部分からの抜粋。

私たちの主、また救い主であるキリストにある恵みと平安があるように。愛する方々よ、
結婚事件でたいへん困っているのは、あなたがただけでない。ほかの人々も同様のためにあつ
10 ている。私自身もそれによって、たいへん悩まされている。それで私は、それに強く抵抗し
て、こうした問題はこの世の権威に任せられるべきだと叫びわめいている。それはキリスト
が「死人に死人を葬らせておくがよい」(マタイ8:22)と言われたとおりである。

※中略

だれも、結婚が着物や食物、家や家財、この世の権威の服従のように、外的なこの世的な
15 ことであることを否定できない。人々に課せられている多くの帝国の法律が証明するとおり
である。また私は、新約聖書において、キリストや使徒たちが自らそうした事柄に関わって
いるような例を、どこにも見出すことができない。聖パウロがコリント人への第一の手紙第7
章で述べているように、それが良心に関わる場合は別である。

※中略

20 それゆえ、私はそういう問題に巻き込まれることを少しも欲しないだけでなく、あらゆる
人々に、それによって私をわずらわさないようにと願い、もしあなたが主権者をもっていな
いなら、司教区判事がいる。もし彼らが正しい判断を下さなくとも、それが私と何の関わり
があろう。彼らに責任があるのであり、彼らはその職責を引き受けたのである。私はまた教
皇の実例(結婚問題による破門)によってぞっとさせられている。彼はこの問題において混乱
25 を引き起こした元凶であり、このようなこの世的な問題を自分のもとにひったくり、皇帝や
王の上に公然たるこの世の君となるまでに至ったのである。

そこで私はここで、犬がぼろきれを噛んでいるうちに革をかじることを覚えるように、我々
もまたよい意図を持ちながら誤り導かれ、ついには福音から離れて全くこの世的な事柄に陥
30 ってしまうまでになることを恐れる。というのは、我々が結婚事件において判事として行動
はじめると、歯車が我々の袖をまきこみ、我々が刑罰を定めなければならないところまで
連れてゆくであろうからである。

※中略

しかし、あなたがたは強く私に指導を求めており、それは単にあなたがた、またあなたが
35 の職務のためばかりでなく、そういう問題についてあなたがたからの助言を求めている無
領主たちのためでもある。そして、私が助言を求められたら、私個人としてはどうするかと
いうことさえ問うている。ことに、あなたがたの領主たちは、靈的なあるいは教皇の法に従

って裁判することが良心の重荷であることをつぶやいている。その法は、そのような問題においては危険であり、しばしば妥当性を欠き、理性や正義に逆らっているのである。そして帝国の法律もここにおいては効果がない。

そういうわけであるから、私は自分の意見をあなたがたに示さないわけにはゆかない。しかし、次のような条件においてである。それを、私はここであなたがたに、またあらゆる人に、はつきり述べておこう。すなわち、私はそれを裁判官や司教判事、あるいは君主としてなすのではなくて、良心的に、よい友だちに特別な奉仕をするように、助言という方法でなしたい。

そこで、もし誰かが、私の助言に従うと思うなら、彼の責任においてそうしたらよい。しかし、もし彼がどのようにそれを行つたらよいかわからないなら、私のもとに隠れ家や避け所を求めないように、あるいは私にそのことについて苦情を言ってはならない。というのは、これをもって私はどんな政府や法廷の制約の下にも自分を置きたくはないからである。そして、今、誰の下にもいないように、将来も誰の下にもいようと思わない。統治すべき人、あるいは統治したい人が治めなさい。私は、助言できる限り良心を導き、慰めよう。誰でも、これに従おうと欲し、またそうできる者は、そうしなさい。誰でも、そうしようと欲せずあるいはできない者は、やめておくがよい。これが今日までの私の立場であり、これからもそうしたい。

(『ルター著作集第一集・第9巻』 聖文舎 1973年)